

「そしてあなたは何もかも……何もかもその人に渡して終うのです……」彼はソーフィヤの手を持ったまま、ささやいた。

「Assez, cousin, assez! (もう還山です)」と彼女は昂奮して行って、うんざりしたといわんばかりに、いらいらと手をふり離れた。

「そしてもう何もやるものがない、犠牲に捧げるものがないといって、それをあなたは嘆くのです!」彼はずっと瞬いた。「そうなればあなたは街頭にも出るし、いざとなれば暗い夜中でも獨りで……」

「Mon Dieu, mon Dieu!」(主よ)彼女はドアの方を向いていった、「何を仰言るのです?」

…そんなことは出来っこないって、御自分でも知っていらっしやるじゃありませんか!

「みんな出来ることです!」彼はささやいた、「あなたは膝まずいて、彼の手に熱い唇をふれ、歡喜のあまり泣き出すのです……」

彼女は安樂椅子に腰をおろし、頭を後ろに投げて、つらそうに溜息をついた。

「Je vous demande une grâce, cousin (あなたに「つお」願いがありません)」と彼女がいった。

「いいつけて下さい、命令して下さい!」彼は有頂天でいった。

「Laissez-moi! (私を放つて)」

彼はドアの方へ歩いて行って、ふり返った。彼女は身じろぎもしないで腰をおろしていた。その顔には、(早く行ってくれ)といういらいらした表情しかなかった。やっとライスキーが出て

行ったとたん、彼女はフラスコの水をコップについて、ゆっくり飲みほして、馬車の用意をやるにするといいつけた。彼女は安樂椅子に坐って、じっと物思いにふけていた。

數分すると足音が聞えて、帷がぱたりと動いた。ソーフィヤははっとなって、ちらりと鏡を見やって、立ちあがった。彼女の父親がひとりの客をつれて入って来た。それは中年の丈の高いブリュネットで、物思わし氣な顔をした人であった。ロシア的な風貌ではなかった。父はその客をソーフィヤに紹介した。

「ミラリ伯爵、ma chère amie」(僕の親)と彼はいった。「grand musician et la plus amir-

able garçon du monde (大音楽家でおまけ)」。二週間こちらに滞在なさるよ。公爵夫人の舞踏會で

お會いしたんだらう? 濟まなかったね、伯爵のところへ行ったら、つかまって芝居へ行かせてくれなかつたんだよ」

「馬車をやめにするといいつけて置きました、パパ。私も行きたくないんです、彼女は答えた。

ソーフィヤは客に椅子をすすめた。二人は音楽の話をはじめ、ニコライ・ワシーリエヴィッチは口をもぐもぐさせて、客間へ行った。

## 第十五章

ライスキーは夢我夢中で家に歸り、道も通りも通行人も馬車に乗った連中もろくろく見分けもつかなかった。彼はずつとただひとつソフィーヤだけを見ていた。それはビロードとレースの額縁に入り、絹すくめでダイヤモンドに包まれた繪のようなソフィーヤではあったが、もう昔のように泰然自若とした高嶺の花のようなソフィーヤではなかった。

ライスキーは彼女の顔に、おずおずとした生命のはつ日を讀みとり、ちらりと焦燥がうかぶのを見、やがて不安、恐怖が現われるのを見て、遂にひとつの動搖を起すことが出来た。その動搖は無意識的な戀愛への渴望であつたかも知れない。

彼はソフィーヤに疑問を吹きこんだ。それは徒らに失われた過去への疑問であり、また愛惜であるともいえよう。要するに彼は彼女を掻き立てたのである。彼は前途に情熱を、劇を、一個の彫像からひとりの女への移り變りを夢見ていたのである。

彼は獨り合點で、(あの祖先たちもソフィーヤの目の前であの高い壇上から落ちてしまったよなものだ)と、自分の宣傳の小さな成功に氣をよくしていた。

(あと二晩か三晩して、僕があゝの幕の端をも少しあげて見せると、彼女は光り輝く前途に目をやって、急に人生と幸福をつかむのだ)と彼は考えた。(それから先は何時かは彼女の目が驚嘆し

て誰かの上にとまり、それからまた伏目になり、こんどは失神したように大らかな目つきになると、彼女は一瞬に生れ變つてしまふのだ)

「だけどその『誰か』というのは一體誰だろう？」ライスキーはねたましそうに考えた、「一番先に彼女に感情を意識させた男ではないのだろうか？ その男こそ彼女の心に感情そのものを投げこむ權利を持っているのではあるまいか？」

彼は鏡をのぞいて考えこみ、それから小窓によって、それを開けて、新鮮な空氣を吸った。するとヴィオロンチェロの音が聞えた。

(ああ、また鋸を引いている！)彼は前の棟の窓をにらみながら、うんざりしていった、(また同じものだ！)彼はばたんと小窓をしめながら、附加えた。

しかしその音は、にぶくはなつたが、やはり流れて來た。彼は朝晩その窓のなかに樂器の上身をかがめたひとりの男を見、その男が五十回、百回と、殆んどひけそうにもない急調連續を何週間も續けているのを見て來た。しかもそれがもう何か月と経つたのである。

「驢馬め！」と云つてライスキーはベットに横になり、眠ろうとしたが、いくら枕に耳を押しつけても、ヴィオロンチェロの音が、相も變らずビービーとやうに、寢かしてくれない。

「全く驢馬だ！」ライスキーはそう繰返し、自分もグランドピアノに向つて、ヴィオロンチェロを押しつぶそうと、強い和音をやり出した。それから陽氣なトレロモを流し、オペラのモチーヴも幾つかやうて見て、たまらないビービー聲を聞くまいと、無理に即興曲に熱中した。

ライスキーの前にはソーフィヤが立っていた。彼はピアノをひきながらも、ずっと彼女を見つづけていたが、彼女はもう目ざめた情熱を持ち、悩みかつ戀する女となっていた。そしてライスキーの即興が「彼女は誰を愛するのか？」という疑問に達した時、ピアノの音はぶつんと切れた。彼は立ちあがって、小窓をあけた。

「まだやってやがる！」彼は呆れて同じことを繰返しながら、ばたんと閉めようとしたが、急にやめて、その場に立ちすくんだ。

音が違う。あのピーピー聲ではなく、あの難しい急調連続の反覆ではないのだ。強い手が、まるで心臓の神経を支配するように、弓を動かしているのだ。ヴィオロンチェロの音は思うがままに泣いたり笑ったりして、まるで海波のように聴くものを叩き、深淵に投げこむかと思えば、高い山に引きあげて、宙をさまよわすのであった。

ライスキーの眼前には幾つもの世界が開け、まぼろしが浮び、魔術の國がひろがって行った。彼は目と耳を大きくあけた。彼はチョッキ一枚の男の姿を見た。蠟燭の光はしっとり汗ばんだ額を照らしていたが、眼は見えなかった。ボリースは昔ワシユコーフを見つめたように、じっとその男を見つめていた。

（ああ！これは何ということだ！）彼はその洋々と流れるハーモニの波を、恐怖にも近い戦慄を抱いて聞きながら、考えた。

（これは何ということだ？）彼は繰返した、（一體あの男はどこからこの音をとって来たんだ

ろう？誰に貰って来たんだろう？本當に何か月も何年も驢馬のように辛抱して、頑張つて来たためだろうか？何年も胸像を寫生し、鋸の目を立てるように弓を引くのか！それが人間の

像に、繪に火を、生命を通わせる魔術のような點や線となるのだ。あの音に情熱を流しこむ神経質な指の顫いとなるのだ！俺はその點も、神経質な顫いも、あの電光もみんなこの胸のなかに入っているのだ）と彼は自分の胸をたたいていった、（それなのに俺はそれを他人の胸に流しこむ力もなく、自分の火で觀衆や聽衆の血に火をつけることも出来ないのだ！俺はこの聖火を音に流しこむことも出来ず、思うがままに繪にのせることも出来ないのだ！詩や小説の登場人物はなぜきちんと集まらないのだろうか？）

そして彼はまた息をのんで、耳を傾けた。聞こえるのは弓でも、絃でもなかった。それは樂器ではなくて、藝術家その人の胸のように、らくらくと感興をこめて歌っているのであった。

ライスキーは感激の涙を流して、靜かに小窓をしめた。しかし彼といえども、ライスキーといえども、意地というものはあるのだ！彼は……從妹を物にしようとして、どれだけの努力を拂ったことだろう。ソーフィヤのなかに火を、生命を、情熱を醒させようとして、どれだけの知力と想像力と苦勞を傾けたことであろう……彼の精力はこんな方向に流れていたのだ！

（藝術を生活のなかに入れないで、藝術に生命を入れ給え！……藝術は大切に藏っておき給え、精力を大切に給え！）誰やらがライスキーに囁いた。

彼は晝架の前に行つて、琥珀織の緑の掛布をとった。そこにはソーフィヤの肖像が、彼女の目が、肩が、そして彼女の物静かさがあつた。

(「しかも彼女は今ではこんな女ではないんだ!」ライスキーはつぶやいた、(生のきざしが現われたんだ。俺ははつきりそれを目の前で見ているんだ。だがどう擱んだらよいか?……) )

彼は筆を、パレットを取りあげ、目をすがめ、唇の線をすこし曲げたが……溜息をひとつついで筆をおき、離れて行つた。服やレースのピロイドはどうにか描けているが、何よりも手が本物ではない。それに暗くて、夜は繪具も變るのであつた。

彼はそのほかにもまだ埃をかぶつた繪を何枚か見た。みんな描きかけて、やめたスケッチであつた。それから煖爐の傍により、何枚かの額をとりあげ、そのうち二三枚は手をとめて見た。そのなかにはヘクターの首もあつた。

最後にライスキーは小さな油繪をとり出した。それはブロンドの若い女の肖像で、さっさと描いて、軽く色彩をつけたものであつた。彼女はその肖像を晝架にかけ、テーブルに膝をつき、髪毛に指をつきこんで、深い憂愁をこめた目をじっとその頭に注いだ。

彼はいつまでも夢見るような物思いにふけていたが、やがて我にかえり、事務机に席を變えて、手稿をめくり始めた。そのうち幾つかに目をとめ、幾つかは首をふつて、机の下の屑籠に、破つて投げこみ、あとは別にして重ねた。

こうした文學的な試作の詩や散文のなかに一冊のノートがあつて、「ナターシャ」という題が

ついていた。

そこには古いひとつのエピソードが書いてあつた。それは彼がやつと花の盛りの年頃になり、人生に接近し、戀し戀された頃のものであつた。彼はその時の生活感情に支配されて、いつか書きのこして置いたのである。しかしその時までは何のために書いておくのかは知らなかつた。あの頃の女友達の思い出にこの數枚のノートを捧げようというセンチメンタルな目的であつたのか、若い日の自分の戀の記録と思ひ出を老後に残そうというのであつたのか、それとももうその頃からアヤーノフに話したあの長篇小説の腹案があつて、そのために自分の生涯から感銘のふかい小説の梗概を残して置こうとしたのか、それは判らなかつた。

彼はこの原稿のなかに自分を三人稱で語り、軽い筋書を書きなぐつて置いたが、そこには愛する優しい女の姿がかるうじて浮んでいるにすぎなかつた。その後ライスキーは長篇小説を書こうと考へ、この短篇を書きなおして、ひとつのエピソードとして入れる豫定にしていた。

ライスキーは自分のノートを小さな聲で朗讀した。

……彼は俳優仲間のダイナーがすんで歸宅し、自分の机の上に一通の手紙を見つけた。その手紙には「可愛いポリース、訪ねて来てちょうだい、私死にかけているのよ!……あなたをナターシャ」と書いてあつた。

「えつ、ナターシャ!」彼は自分の聲とも思えない叫び聲を立て、階段をかけおり、街頭に飛

び出し、辻馬車をズナメーニエに飛ばし、横丁に曲り、一軒の家の三階にかけ上った。

(二週間も行かなかつたんだ。二週間といったら永遠だ！ 彼女はもうしたんだらう？)

彼はドアの前に立ちどまって、たかぶつた息をしずめ、わくわくしてベルの把手を握ったり、やめたりした。彼はとうとうベルをならして、中に入った。

彼を迎えたのは部屋主の中年の婦人であった。その官吏夫人は黙って、とがめるように目を伏せて彼のお辭儀に答え、「彼女はどうですか？」と聲をふるわせて、ささやくようにたずねても、何にも返事しないで、ただ道を通して、そつと後のドアをしめ、別室に引きとった。

彼は爪先立って、部屋に入り、(ナターシャはどこにいるのだらう？)と不安氣に彼女を目でさがした。

部屋の中には馬毛入りのマホガニーのソファがあり、ソファの前に丸テーブルがあり、テーブルの上には裁縫函と、やりかけの女の仕事がのつていた。

部屋の隅には臺ランプがとまり、壁ぎわには馬毛入りの椅子がならび、窓には萎れかけた花のささった壺と、二つの鳥籠があつて、そのなかにカナリヤが丸くなって眠っていた。

彼は衝立を見つめて、なかに入る勇氣がなく、立ちつくしていた。

「どなた？」衝立の向うから弱々しい聲が聞えた。彼は中に入った。

衝立のかげのベットには、若いブロードの婦人が枕にうもれ、暗い常夜燈の火影に照らされて、蠟細工のように臥ていた。その眼はあつく乾いており、唇も熱っぽく乾いていた。彼女は彼を見

ると、寢返りをしようと、元氣な身ぶりをして、手で胸をおさえた。

「ああ、あなたあの、ポリース！」彼女は優しく、惱ましげな聲で、うれしそうにいつて、や

せほそつた青い兩腕を差し出して、まだ自分の目を疑うように、じつと彼を見つめた。

彼は駈けよって、彼女の手に接吻した。

「君臥ているくせに、どうして今日まで僕に知らせてくれなかつたんだ！—彼は責めた。

彼女は力のない手で彼の手を握ろうとしたが、それも出来ないままに、また枕に頭をのせた。

「ご免ね、今日も心配させて」、彼女は精いっぱいおうとした。「あなたに會いたくなつたの

よ。まだ一週間しか臥ていないの、胸が悪くて……」彼女は溜息をついた。

彼は彼女の言葉など聞きもしないで、びっくりして顔を見つめていた。ついこの間まであんなにここにこしていたのに、今は何という變りようだらう！

「君どうしたんだ？……」と彼はいおうとしたが、こらえ切れなくて、彼女の枕にうつ伏せになつて、急に聲をあげて泣き出した。

「あら、どうしたの？」彼女はやさしく彼の頭をなでながらいった、その涙がうれしかったの

である、何でもないのよ、先生は治るって仰言つたわ……」

しかし彼は泣きつづけた。治らないと分つていたのである。

「あなたに慰めて貰うのかと思つていたわ。ひとりで臥ていると、とても淋しくて、恐ろしい

のよ……」彼女はぶるると慄えて、あたりを見廻した、「あなたの本はすっかり讀んじやつたわ、

それ椅子の上にあるでしよう、彼女はいいました、「あとで読み返したり、私が鉛筆で書いて置いたのが分るわ。あなたと私のように……愛し合った……似たところはすっかり線を引いておいたのよ…… ああ疲れた、話も出来なくなつたわ……」彼女はいいやめて、熱い唇を舌でぬらした。「水を頂戴、そのテーブルの上にあるでしよう！」

水を数滴飲むと、彼女は身ぶりで枕の端をさして、彼に頭をのせるようにといった。そして彼の頭に手をのせた。彼はそつと涙を拭いた。

「ここに居るのは退屈でしようね、彼女は力のないいい方をした、「呼びつけて済まなかつたわね…… 今日はとてもいいのよ、あなたには分らないでしようけれども！」彼女は空想的な忘我状態で、目をとじて、彼の髪をなでながらいった。それから彼を抱いて、無理に微笑を浮かべながら、じつと目を見た。彼は湧き出る涙を飲み下しながら、無言で彼女の愛撫に答えていた。

「今日は私のところにて下さるわね？」

彼女は彼の目をのぞきこみながら、たずねた。

「一晩中、君の側を離れはしないよ……」

また涙がこみあげ、彼はやつとの思いでそれを飲み下した。

「いえ、いえ、そんなことはいけないわ！ あなたに退屈な思ひはさせたくないのよ…… あなたは安心して眠って頂戴、私何ともないんだから、本當に何とも……」彼女は笑おうとしたが、出来なかつた。

「私すこしあなたにいいたいことがあるの、あなた怒らない？……」

彼は彼女のしつとり汗ばんだ手をにぎった。

「私悪智慧を出したのよ……」彼女は彼の頬に自分の頬をつけて、ささやいた、「私もう一昨日から樂になつていたのよ、だけど手紙には死にかけているなんて書いたのよ…… あなたの氣を引いて見たかつたのよ…… ごめんね！」

彼女はにっこりしたが、彼は恐ろしさにぞつとした。彼はその「樂になつた」が何を意味するかを知つた。しかし彼も努めて微笑をうかべ、ひきつるように彼女の手をにぎりしめて、おずおずと彼女の顔を見たり、自分の周囲を見たりした。

彼は社交界から、賑やかな親友や、藝術家や、美人たちの仲間から、不意に墓穴に落ちたような氣がした。彼はベットの横に腰をおろして、自分の空想のなかに没入して行つた。そこには若い彼の生命をのばす廣々とした天地と、不意に身にふりかかつた悲しみとが、對照的な二枚の繪のように並んでいた。にぎやかな広い部屋、花に埋まつた豪華なディナーを圍んで、大聲に歌つたり話したりする元氣な一群の仲間。泡立つグラス。その仲間にはさまれた、美と喜悅にかがやく賑やかな婦人たちの顔。そこには女流音楽家も、バレエの踊子も、歌姫も、藝術家もいて、すべてが黄金の青春であり、美であり、慧智であり、才能であり、ユーモアであつて、一切が人生の日向であつた！ 彼はそこから一擧に暗い日蔭に、この小さな見すばらしい部屋に、なき倒されて、消えゆく生命の部屋に落ちこんだのである。

あちらの祝宴の女王は若さに輝く新鮮な額や目をもち、瀑布のように後頭から首筋におちる黒い下髪をもち、高くもり上った胸と、ふくよかな肩を持っていた。それがここでは落ちくぼんで、やっと火花のようにきらきらする眼と、かさかさで艶のない髪と、くぼんで骨ばかりの手になっている……この二枚の繪は恐るべき兩極端となって彼を壓倒した。その兩極端の間には大變な溝があるくせに、それがびったりと喰っついて並んでいるのであった。畫廊ではこの二つの繪を並べないことになっているが、人生ではそれは並んでいるのである。彼はきらきらと目を光らせて、二つの繪を見つめた。

彼は恐怖と悲嘆の戰慄を覺えた。彼は無意識に人物を集め、それぞれの人物にも、自分にも席をきめ、足りないものを附けたし、全體の構圖を壊すものを取り除いた。と同時に彼は自分の容赦ない空想の道程が恐ろしくなつて、心臓に手をあてて、痛みをおさえ、恐怖のあまり氷のように冷めなくなった血をあたため、そして彼女の病的な呻きもれるたびに、自分の口から恐ろしい絶叫となつて、ほとぼしり出ようとする苦痛を抑えるのであった。

この死の床の戀は、灼熱の鐵のように彼を焼いた。彼はひとつひとつの愛撫を、まるで墓の上からもいで来た花のように、男泣きに受けるのであった。

さて痛みがおさまつて、ナターシャの辛そうな息づかいだけしか聞えなくなると、彼の前には今こうして消えなんとする生命の歴史がすっかり展開されるのであった。彼はそこに病身で貧しい女親の頼りない監督をうけて暮らしていた、人の好い恥らい氣味の目つきをした、ありし日の若

い小娘としてナターシャを發見するのであった。

彼がナターシャを知つたのは、彼女の無智と無邪氣さに網がかかろうとしていた、危険な瞬間であった。ある白髪の偽せ友達が同情を装い、昔なじみをふりかざして、母親のために恩給を受取るように世話をし、醫者もよこし、そして毎晩病氣見舞いにやつて來ては、父親のようなそぶりで娘に熱い接吻をしていたのであった……

そのうちに母親は次第に弱つて行つた。それはいまこのうら若い娘の生命を奪っているのと同じ病氣であつた。ライスキーはすべてを理解して、娘を救うことに決心した。

彼は「恩人」の張つた網から眞心をもつて熱心に母親を救い、親の目も子の目もさまして、自分の義侠心をさとらせるうちに、自分でもナターシャに戀し、ナターシャも彼に戀し、二人は互のうちに幸福を發見し、母親の死の床でこの幸福への祝福をうけたのである。

二人は家庭的結合について共通の單純で誠實な理想を持っていた。彼はナターシャのあどけなさを尊び、彼女はライスキーの心を敬っていたので、二人は結婚の花冠に手をさしのべたが……とうとうそれまで待ちきれなかつた。

母親は半年ほど病床で苦しんで、死んだ。その棺、二人の結婚を前にして、彼女の若い生命を突如として襲つた深い喪は、彼女のひ弱い遺傳性の病身を傷けた。その病める體内には哀悼や病氣よりも、一層強い戀が燃え、幸福への焦躁と渴望が波打っていた。

醫師たちはその渴望をさしとめた。三四カ月待たねばいけません——と二人はいいつけられた。

結婚の祭壇は待つていたが、二人の戀はずんずん進んで行った。

こうしてライスキーはナターシャを老人から救い、貧乏から救ったが、彼自身から救うことは出来なかつた。彼女は情熱をもって彼を愛したのではなく、何ものにもたじろかず、何ものをも恐れぬ戀で、涙も苦痛も犠牲も感じないで愛していた。というのが彼女は犠牲とは何ごとであるかも知せず、一度愛してあとで愛しなくなるなど出来るものでないと考えていたからである。

彼女から見れば戀するということは呼吸し、生きることを意味し、戀しないということは呼吸も生活もやめることを意味するのであった。ライスキーが、「君は愛しているかい？ どんな風に？」とたずねると、彼女はきつく彼の首を抱きしめ、齒を喰いしぼって、「ほれこんなに！」と子供っぽい返事をするし、「愛しなくなるかい？」とたずねると、考え深そうに、「死んだら、愛しなくなるわ」と答えるのであった。

彼女は何ひとつ求めず、何ひとつ望まないで愛していた。そしてあるがままに相手を受け入れて、相手が今とは違った人間になれるとか、なる筈だとかいうことは想像したこともなく、この戀と違った別な戀があるものか、誰でも自分の通りに戀するものかなどということも考えたこともなかつた。

しかしライスキーは情熱を心に描き、その無限に變化する姿を思い、ありとあらゆる閃めく稲妻を思い、強く火のように烈しい戀のあつさを思い、そして二人は戀の夏に、暑い時節に入ったのである。

ナターシャは美しくなり、肥って、快活になつたが、彼女の顔には一度も秘めかくした陶酔の秘光がきらめくこともなく、彼女の魂をやく焔を語る向う見ずの眼差が浮ぶこともなかつた。

しかしそこには幸福に必要なものは何でもあつた。永遠の温い隠れ家が心のために開かれていた。また理知のためには自ら伸びて彼女を伸ばし、若い女の、吸収力の強い理性を指導し養成するという終ることのない長い仕事があつた。これも恵まれた土壌の上で、自分のために自らの幸福の生きた理想を作りあげるといふ創造的な仕事であつた。

しかし空想は華麗さを、不安を求めていた。この空想が眠っている間、彼の生活は停つていたやうなものであつた。しかしナターシャは何ひとつそんなことに氣づかず、ライスキーの心の中に、戀と一緒に、そんな毒蛇が巣くつていようなどとは疑つたこともなかつた。

ナターシャが戀するようになってから、彼女の眼にも微笑にも、静かな天國が輝くやうになつた。その天國はもう二年間も輝やいて來たし、今もこの死にゆく眼の中で輝いていた。さめ行く唇は相も變らず「愛しているわ」とささやき、手はいつもの通りに愛撫を繰返すのであつた。

彼は時々疲れて、何か月も姿を消すことがあつた。そして歸つて來ると、また同じやうな微笑と、静かな眼のかがやきと、優しく打ちつけた愛のささやきに迎えられるのであつた。

彼はいつでもそうした歓迎をうけるものと信じこみ、永いことその信念をエンジョイしていたが、やがてその信念そのものに飽き、幸福が壞れ始めるのを發見した。

昔はあなたはそうじゃなかつたとか、明日はまた今日のようにしていいないとか、自分はほつた



らかされ忘れられて恐ろしい孤獨の日を送っているとかいって、責めたり、泣いたり、驚きや屈辱の目つきをしたりすることは一度もなかった。

彼女は心にも頭にも非難も涙も持たず、一度も口に出して責めたてることもなかった。彼女は自分の権利を楯にとつて、怒ったり、泣いたり、嫉妬したり、望んだり、求めたりしてよいものだと思つたこともなかった。

彼女はただ一つ戀するという望みと權利しか持たなかった。彼女はこの通りにしか戀も出來ず、戀されもせず、世界中がこの通りに戀し戀されるのだと考えて、信じこんでいた。

彼の留守は、例えば病氣になつたと同じような、偶然の不愉快な成行きだと思つていた。また彼が歸つて來れば、彼女は至つて幸福だし、いなければ居ないで、それが當り前で、そうなるべき筈だと考へるのであった。

彼女の一生にも時々、屈辱や悪意が別の方向からも降りかかつて來た。彼女は苦痛や驚きに蒼くなり、よたよたとつて無意識に苦しみ、従順に敵意をうけとつていた。屈辱を與へることも、敵意を報いることも知らなかった。

彼女は自分の氣に入つたものに愛着を感じ、そして何もかも、こうあるべきものを考へて、その愛着を抱いたまま死んで行くのであった。

人生と戀愛は彼女に頌歌を歌つてきかせたようなもので、彼女はその歌を聞きながら甘美な物思いにふけていた。そして敵意や、痛疼や、苦勞に對し何の不滿もない彼女の死に行く顔には、

感激と信頼の涙だけが浮んでいた。

彼女が死んだのは、投やりな教育や、投やりな監督のためでもあり、貧しく狭苦しいなかに過した病的な幼年期のためでもあり、彼女の肉體に遺傳されて死病となつた毒の滴のためでもあり、そして最後にその「かくあるべきもの」が彼女の側からは何の號泣も、憤激も呼ばなかったにも拘わらず、やはり彼女の弱い、若い胸に積み重なつて、彼女をすりつぶしたからであつた。

彼女は現在自分の死について誰ひとり何ひとつ非難していかないように、かりに永生きしたとしても人生も、伴侶も、彼の變りやすい愛情も、誰をも、何ひとつ非難しなかつたであらう。そして彼女の病身の受難の生涯も、若死も、彼女にはこうあるべきものと思われたことであらう。

彼女は自分の伴侶が時々目のなかに浮べるあの無關心や退屈や無言の行の意味をさぐつたこともなく、冷めた戀に感づくこともなく、その原因も決して理解しなかつたのである。

ところがライスキーは彼女の傍にいても、よく死人のように無言の行をやつて見せて、彼女の氣のよいおしゃべりに返事もせず、親しみぶかい愛撫に答へもしないことがあつた。

(いやいや、これはあの女ではない、あの激流のように人生に流れこみ、あらゆる障礙物を押し流し、野原に氾濫するというあの女ではない。また火のように道を照らし、力を呼びさまし、これにエネルギーの筋金を入れ、ひとつひとつの瞬間に、ひとつひとつの思想に戰慄を、熱を、甘美さを、そして情熱を與え……生活を指導し、その意味と課題の解決を助け、それを完成させるといふ女ではない。そんな雌獅子はどこで探したらいいだろう？ この仔羊はやさしく草をつ

み、尾をふって、まるでお袋にすがりつくように、俺にすりよって来る…… いやいや、これは植物の生活だ、人生ではなくて、夢だ……)

ライスキーは彼女の甘え聲や愛撫に對してのうのうと欠伸をして見せ、帽子をつかんで何週間も何ヶ月も姿を消しては、藝術家のアトリエや、午餐會や晚餐會に出て、酒氣と騒音に身をまかせるのであった。

さてライスキーは今ナターシャの病床にはべって、心のなかで彼女の一生と、自分の戀物語を讀んで行った。そしてその物語が靜かに展開して行くと、彼の眼前には瀕死のナターシャの姿が優しい詰責となって現われ、彼は顔色を變えた。

彼は自分の忘却を、投げやりを思い出した。全くこれ以上の屈辱はまたとあるものではない。どんな惡魔でも、この鳩のように優しく、報いを求めない眼差を見たら、膝まずくであろう。

彼は自分ひとりに捧げられたこの生命に對して大海のような愛を報いなかったことを、自分が父の、兄の、夫の愛でやさしく彼女を包んでやらなかったことを、そして彼女を風にさらしたばかりでなく、死の手にまで任せたことを、呪うのであった。

(死！ 神様、彼女に命を幸福をやって下さい、僕から何でも取りあげて下さい！)彼の心のなかには、手おくれの絶望的な祈りが湧いた。彼は心のなかで斷頭臺にのぼり、進んで自分の首をさし出して、叫んだ。

「僕は罪人だ！…… 彼女を殺しはしなくても、殺したのは僕だ。僕は彼女を理解しようと

思わなかった。そしてなごやかなランプの光と花のあるこの場所に、地獄と電光をさがし求めたのだ。僕はいったい何者だろう、おお！ 僕は惡漢だ！ 僕はよもや……」

彼はまた彼女の枕に顔をうめ、心のなかで死んでくれるなと祈り、自分を犠牲にしても幸福にしますと誓うのであった。

「晩かった！ 晩かった！」絶望と、ナターシャの辛そうな息づかいが、そう彼にいった。

彼は思い出した、彼女が自分の一生の目的のようになり、彼がナターシャと二人で幸福の花模様を織っていた時、彼は蛇のように彼女の花のなかに忍びこみ、繪にあるようになごやかな光にくるまったのである。ナターシャの道徳的な本質を作っている眞心と優しさを認めると、彼は誠實になり、彼女の微笑を自分もつかべ、彼女と一緒に小鳥や花を見、子供のように彼女の新しい服をよろこび、彼女と一緒に母親や女友達の墓に詣って、彼女が泣くままに自分も泣き、花もささげたのであった……

彼はまた思い出した。自分はナターシャと同じように眞心から小鳥に見とれ、花をさし、そして泣いたのだ。だが一體あの涙は、微笑は、罪のない喜びはどこへ行ったのだろうか。どうしてそれが詰らなくなつたんだろう。そしてなぜ今では彼女は自分には用のない人間となつたのだろうか？……

「何を考えていらっしやる？」ナターシャの力ない聲が耳もとで聞えた、「水をも少し飲まして…… そんなに見ないでね」、水を飲んで彼女はつづけた、「私すっかり面變りがしてしまつて！

櫛とナイトキャップを取って頂戴、被るから。でない……こんな醜い顔で……あなたに嫌われるから……」

彼女はライススキーがまだ自分を嫌いになっていないかと思っていたのだ！ 彼は櫛と小さなナイトキャップを渡した。彼女は髪を解こうとしたが、櫛は手から膝に落ちた。

「出来ないわ、疲れちゃった！」彼女はそう言って、悲しげに考えこんだ。

彼はその間も庖丁で斬られる思いで、頭が熱くなった。彼は椅子から飛びあがって、頭のなかで空想を描きながら、部屋のなかを歩き廻り、昂奮して自分が何をしているのか判らない様子で、隅から隅へよたよたと歩き廻った。彼は部屋を出て、主婦のところへ行き、ナターシャの主

治醫は來ているかとたずねた。

先生は御見えになつたし、別の先生も連れておいでになりました、私はこれこれの金を拂って置きましたと主婦はいつて、すっかり書いて置きましたと附加えた。

「で何といたしました？」彼はたずねた。

「判っているじやありませんか。あの子を見、胸を聴診し、次の部屋に來て、だまって肩をすくめ、それから差しあげたお札を拳にぎって、服のボタンをかけて、けそけそと姿を消したんですよ」

ライススキーはその簡単な報告を聞くと、恐ろしさに呆然となり、またベッドの傍に歸った。友だちとの元氣のよい酒宴も、女優たちも、歌姫たちも、酒の賑いも——すべてがこの生命をのば

す望みと共に、すっかり消えて無くなった。

彼の目前には、訴えもせず、愛と従順の微笑をうかべて苦しみ、消えて行く顔だけしかなかった。それは何ひとつ求めず、庇護も、少しの力添えも何ひとつ乞わない存在であった！

一方その場に立っているライススキーは、健康と精力にあふれ、必要もないのに今日もそれを浪費し、この小鳥を嵐と荒天にまかせていたのである。

彼はなぜ自分をこの場につなぎとめて置かなかつたのだろう。嘗ては可憐でいとしかつたこの女の印畫が彼の空想のなかで色あせて見えるようになった時、その美しさに慣れっこになった時、なぜ彼は出て行つたのだろうか？ 彼の空想のなかに別の人影がひしめくようになった時、ライススキーはなぜ踏みこえなかつたろう、なぜ突っ張らなかつたろう、なぜ彼女の姿に忠實を守らなかつたのであろう？

それは大きな仕事ではなくて、ひとつの義務であつた。この世の中には犠牲も拂わず、努力も耐乏もなしに生きて行くことは出来ない。(人生は花だけしかない花園ではないのだ)とライススキーはおくれ馳せながら考へて、ルーベンスの「愛の園」という繪を思い出した。その繪には立派な紳士と美しい婦人たちが一組ずつ木の下に腰をおろして、その周囲をキュービットが飛び廻っていた。

「嘘つき奴！」彼はルーベンスを怒鳴りつけた、「なぜこの男は戀する男女の間にシャツ一枚の乞食や瀕死の病人を配しなかつたのだろう。その方が本當じやないか……だが俺にはそれ

が出来るだろうか？」彼は我と我が身にたずねて見た。ライスキーが彼女のための彼女との共同生活を我が身に強制したらどうだろう？ 睡氣と無感動と、世にも恐しい退屈さだ！ 彼の前には既成の空想となつてその生活の長い長い展望が現われ、その睡氣と無感動と退屈の風景が浮んで来た。彼はその風景のなかで苦りきつた、やかましやの、かさかさの人間となつていて、とつとと彼女を墓穴に追い込んで終いそんな姿をしている自分を見た。彼は絶望のあまり匙をなげました。

(頭張って狂氣にならずにいることは出来るが)と彼は自ら辯解した、(無感動になるまいと頭張ることは出来ない。いくら意志を張りつめても、退屈をのがれることは出来るものではない！) またそんなことをしたら、彼女を殺すことになるのだ。年がたてば彼女だって悟るだろうから…… そうだ、年がたてば、またそのうちには慣っこになり、あきらめて、生きて行くかも知れない！ だが今は死にかけていて、彼の一生には不意に思いがけもない急速調の劇が、一大悲劇が、深刻な心理小説が出来あがるのだ……)

「ここへ来て、傍にいて頂戴！」ナターシャが聲をかけて、彼の思いを破った。

それから一週間後に彼はうなだれてナターシャの棺の後を歩きながら、自分が早くも彼女に飽き、たびたびしかも永いこと彼女を忘れ、十分の保護を加えなかったことについて自分を呪っていた。またそうかと思うと自分には自分の戀を支配する力がないとか、自分は一度だって意識的に彼女を悲しませたことはなかったし、いつでも彼女にやさしい態度をとって、氣を使っていた

のだとか、または自分ではなくて彼女こそ消えることなき焰を續ける材料が足りなかったのだとか、彼女は自分の戀のなかに眠ってしまつて、それっきり一度もその安らかな夢からさめず、自分をも醒まさなかつたのだとか、彼女には人生を走らせる鞭ともいふべき情熱が毛ほどもなく、創造力も生産力も生み出すことが出来なかつたのだなどと、自ら辯解して行くのであつた……

(いやいや、彼女はそんなものじゃない、彼女は一羽の鳩であつて、女ではないのだ！)とライスキーは靜かに揺れる棺を見ながら、涙ながらに考へて行つた。

彼は物思いにふけりながら教會のなかに立ち、蠟燭の光にかぶ空氣の震動を見つめ、數少い會葬者の群をながめて見た。その先頭に立っていたのは丈の高い肥つた親戚の紳士で、それが平然とタバコを喫いでいた。その横には涙のなかに溶けそうに赤くなつた伯母の顔があり、續いてひとかたまりの子供たちと、數名の貧しい老婆がいた。

棺の横にはナターシャの女友達が膝まずいていた。彼女は一等おくれてやつて来たが、誰よりもナターシャの死に打ちのめされていた。髪もゆわず、彼女はきよとんとあたりを見廻わし、次に故人の顔を見て、頭を床につけて、引きつるように號泣した……

ライスキーはそのそと家に歸り、二週間というもの死んだように黙りこんで、アトリエにも顔を出さず、友だちにも會わず、人氣のない街々をさまよつていた。悲嘆はおさまり、涙もかれ、鋭い痛みは靜まつて、頭の中には蠟燭の光に揺れる空氣と、靜かな歌聲と、涙にとけた伯母の顔と、女友達の聲を忍ばせた引きつるような泣き聲だけが残つた……

原稿はこれで終っていた。

ライスキーは朗讀を終って、しばらく苦りきって、物思いにふけていた。

「この短篇は色彩が足りないよ！」彼は獨り言をいった。「近頃はこんな風な書き方はしないのだ。この子供っぽさは『薄命のリーザ』(カラムジンの中篇小説)の時代に應わしいものさ。それにあの女の肖像畫も」と彼は畫架の前によっていった。「肖像畫ではなくて、やっとな色のついたスケッチだ」

「薄命のナターシャ！」彼はスケッチをながめながら、とうとう溜息まじりに彼女の思い出をうち切った。「君は生きていた頃にも、この僕が繪筆で描いた肖像や、ペンで書いた文章と同じように、ろくに人生の生彩も持っていなかったのだ！これは兩方ともやり直さなくちゃ！」と彼は結論をくだした。

それからライスキーは溜息まじりに一束の紙をとり出して、新しい小説の筋書を作った。

もう思い出となったこのエピソードは、他人の事件のような氣がした。彼はそれを客觀的に取扱って、新しい筋書の第一段に置いた。

彼は夜があけるまで書き、一日に何度となくノートを取り出し、夜歸宅するとまた机に向い、自分の目の前に浮ぶものを書きこんで行くのであった。

いろいろな情景や、親戚、知友、婦人の性格や風貌を彼はそれぞれのタイプに書きわけて、何冊ものノートを作り、手帖を持ち歩いては、よく人中や、夜會や、ディナーなどでメモと鉛筆を

取り出して、二三語書いては藏い、また取出しては書きこみ、考えこんだり、ぼんやりと見とれたり、物をいいかけて途中でやめたりするかと思うと、急に人ごみを離れて獨りぼっちになりするるのであった。

そうするうちにも人生は彼を創作の夢からよびさまし、藝術的な苦樂からいきいきとした現實の苦樂に呼びこむのであった。そうした苦しみのうちで彼にとって一等辛いのは退屈であった。彼は感覺から感覺へ飛びあるき、いろいろな現象をあさり、印象を大切にして、殆んど力づくで引きとめようとし、想像の糧を求めればかりでなく、絶えず何かを探し求め、何かの上に踏みとどまろうと試みるのであった……

今ではライスキーは従妹のペロヴオードワに對して、自分でもまだはっきりしないが、ある望みをかけ、彼女との接近を楽しんでいた。彼はたびたび彼女に會って、話しをし、彼女の心に生命を呼びさまし、出来れば情熱をよびさますより他には何の慾望もなかった。

しかし彼女は難攻不落であった。ライスキーは疲れだし、退屈が頭をもたげて來た……

## 第十六章

五月はすぎた。北極圏内のペテルブルグの夏をさけて、どこかへ出かけねばならなくなった。だがいったいどこへ行ったらよいか？ ライスキーから見れば、どこへ行っても同じことであった。彼はいろいろの計畫を作ってみたが、どれ一つこれと云うものはなかった。まずフィンランドへ行こうとしたが、やめにして、バルゴローヴォの湖沼地帯(ペテルブルグから十五、六軒北方)に籠って、小説を書くことに決心した。しかしこの計畫もやめにして、本気でパーホチン一家と、リヤザン縣にある地所に行くつもりでいたが、パーホチン家の方で氣を變えて、ペテルブルグに腰をすえることになった。

世をあげての夏の外國立命は、ライスキーまでも國外に引っぱり出そうとしたが、問題はひょっこり思いがけない解決を見た。

ある日歸宅して見ると、ライスキーは自分の机の上に二本の手紙を發見した。一つはタチャーナ・マルコヅナ・ペリョージョワの手紙で、もひとつはライスキーの大學時代の同級生で、今は彼の故郷で中學の教師をしているレオンチー・ゴズローフの手紙であった。

祖母は初めのうちはたびたび手紙をよこし、計算書を送っていた。ライスキーは永いこと母親代りをしてくれたこの老婦人の手紙に對し、愛のこもった簡単な返事を書き、計算書は破って、

机の下の屑籠に投げこんでいた。

その後祖母は手紙を書くことも少くなり、年をとり、目も見えず、孫たちの教育の氣苦勞も多いとこぼすようになっていた。だから今日の祖母の肉太なきびきびした筆蹟を見ると、ライスキーは大喜びした。

「……ポリース・パーヴロヴィッチ、年寄の私を忘れて、罪なことをするんじゃないやありません！」と彼女はその手紙に書いていた、「そなたの肉身と云ったら、私ひとりではありませんか。ちかごろは時勢が變つて、どうやら年寄は邪魔ものになった様子で、若いものはそう考えているんでしょう。ところが私は死んでも死にきれませんよ。二人の孫娘を抱え、それがもう嫁入盛りでね。二人を片づけるまでは、壽命を延ばして下さいと神様に御祈りしています、二人さえ片づけばあとはもう神様の思し召し次第です！」

「私を忘れたからといって、何もそなたを責める譯ではありませんが、もしも私が死んで終えば、うちの娘たち、血こそ引いていないがそなたの妹に當る二人の娘たちは、獨りぼっちになります。そなたはこの娘たちの一番身近な親戚で、一番身近な保護者なのです。それから地所のことも考えて貰わねばなりません。私はもう年を取って、いつまでもそなたの監理人をする譯にも行きません。しかしそなたはこの財産を誰に任せますか？ みんなばらばらになつて、何ひとつ残らなくなりますよ。こんなに大切に出来たお寶をあとかたもなく失くしてよいものでしょうか？ 家傳來の銀器や、青銅や、繪や、寶石や、レースや、陶器やガラス器が、

みんな召使どもの手からちりぢりになって、ユダヤ人や高利貸の手に入り、ヴォルガ河を下って年市に出されて、二束三文になってしまふのかと思うと、私は心臓も凍るようです！ 私が生きているうちは絲屑一本なくしはしないから、安心していなさい。しかしあとは誰ひとり任せる人もいないのですよ。孫娘たちはどうかって？ ヴェーラは善良で頭がよいけれども、野放しの世間嫌いで、どこにも顔を出しません。マルフィンカは主婦の手本となるでしょうが、まだ若いしね。もういつからお嫁に行く年頃なのに、まだ子供みたいな考えです。いいあんばいといえばいいあんばいですがね！ いまに年を取って、経験もつむことでしょう。私もあの子を大切にしているし、あの子もそれをありがたく思っていて、私の承知しない結婚はしません。あの子はきつと神の恵みがあることでしょう。マルフィンカには家のことは手傳わせていますが、地所の管理には口を出させません。これは娘っ子の知ったことではありません！ 今では召使のうちにサヴェリーという眞面目な百姓がおります。私は年をとったから、村のことはこの男にまかせております。それから家のことはヤーコフとワシリッサが何でも用をたしてくれ

ます。

「すぐにやって来て、お祖母さんを喜ばしてください。お祖母さんは血系のうえでばかりでなく、心でもそなたと近い間柄です。若い頃はそなたもそれが判っていて、よい孫だったが、今は大人になってどうなっているか判りません。せめて妹たちの顔を見になりと、やって来て下さい。ひょっとすると、いいことがあるかも知れませんよ…… 来るまでいわないで置くつ

もりでしたが、女心の常で我慢が出来ません。税金徴収人のマームイキンという人が、モスクワからこちらへ移って来ました。その人は嫁入盛りの娘さんを持っています。天にも地にもたった一人の子供さんです。神様の思し召しで、そなたに嫁をもらって、手から手に地所を引渡したらどんなに喜しいことでしょう。そして私も安心して目をつぶれます。ポーリュシカ、嫁をもらっておくれ。そうすればうちの孫娘たちも私が死んでも宿なしにならなくても済みます。そなたはあの子たちの兄弟とも、保護者ともなり、そなたの嫁女は善い姉さんになります。そなたが獨身でいる間は、二人の娘も生きて行けないのです。どうかお祖母さんのいう通りに結婚して下さい、きつとよい報いがありますよ！

「ご返事を待っています。前以て手紙を出して下さい。階下にそなたの爲に三部屋掃除させて置きます。マルフィンカは二階の小さな部屋へ移らせます。お前はここの主人なんだから！ 「チート・ニコイヌイチからお前によろしくとの事です。あの方も年を召したけれども、まだお元気です。昔の通りの笑顔をかべ、あの通り利巧なお話して、氣持のよいお辭儀をしています。若いお洒落男なんか、手もなくこなして終いますよ。お願いだから、かもしか皮のジャンパーとズボンを買って来て下さい。近頃はリューマチス除けにそんなものを着るという話です。あの方に贈って、喜ばせてあげましょう。

「ここ二年分の計算書を送ります。私の祝福をうけて下さい。

タチャーナ・ペリョージコワ」

ライスキーは大喜びで叫んだ。

「お祖母さん！ ああ、お祖母さんが呼んでいる！ 行くとも、行くとも！ あそこは静かで、空気はいいし、食物もいいし、善良で優しく聡明なお祖母さんの愛撫が待っているんだ。それに妹が二人もいるんだ。僕はまだその妹たちを知らないけれども、それは近しい人間なのだ……」彼は（田舎のお嬢さんか！ 恐い見たいだな、出来そこないかも知れない！）と考えて顔をしかめた……「だけど行くぞ、これは運命が僕を行かせるんだから…… だけどあちらへ行って、退屈になったらどうしよう？」

彼はどきんとしたが、また氣を静めた。

「欠伸が出たら、さっそく飛び出ささ！」と彼は自らなぐさめた、「行くとも、行くとも、あそこにはレオンチーもいるんだから！ レオンチー！」ライスキーはそのレオンチーを思い出して、笑った、「いったいあ奴は何を書いてよこしたんだらう？」

「昨日僕は何の氣もなく、自分でも氣づかぬ間に君の邸へ行って来たんだよ」、レオンチーは手紙に書いていた、「きつとぼんやりしていたからなんだろう、（君も知っての通り、僕はぼんやりする癖があるんだ）、横丁を間違えて、岡の下に降り、それから上って見ると、君のお祖母さんの庭に入っていることに氣づいたので、引返そうとしたんだ。しかしタチャ・ナルコ・マは窓から見て、最初は夕暮だったものだから泥坊だと思って、犬と召使をけしかけようとしたんだが、僕だと判ったものだから、呼びこんで可愛がり、鱈腹夕食を出して、泊って

行けと寢床の用意までして下さったんだよ。そして僕があまり行かないからといって叱りつけ、君に手紙を出してせひ來させてくれと頼まれたんだ。地所を檢分し、こちらに住む氣なら、手から手に地所を引きついで、そして結婚してくれというお話なのだ。

「正直なところ、親愛なポリリス・バーゴロヴィッチ、僕も君に手紙を書きたいと思っただんだが、勇氣が足りなかったんだ。その理由は以下に書く通りだ。地所など空疎な口實で、お祖母さんは君に會いたくて、仕事も手につかない有様なのだ。君が行ってやればそれに越した薬はないよ。しかしその話は別にして、實は僕は困っちゃったんだよ。さっそく君に來て貰って、最も嚴重な裁きをつけ、犯人を處罰して貰うべき問題があるんだが、どんな風にその話に觸れたらよいか見當もつかないのだ。というの君の藏書のことなのだ。

「ねえ、君は僕を愛してくれるね、それは僕も知っているよ。中學でも大學でも君は誰よりも僕によくしてくれたんだ。君は僕をばげまし、一緒に本も読んでくれた。可愛がって時々援助もし、お主婦さんにも金を拂ってくれたし、……シャツ類も……」、ライスキーは慌ててその一行を飛ばした、「僕を冷かしたり、『悪戯』をしたりしなかった。なぐったこともなく、毆るにしても一番やさしかった。ほんの二度ほど君には髪毛を引っぱられたことがあるだけだが、他の連中と來たら…… しかしあの悪戯小僧どもはどうでもいいんだ！ あの連中にしても悪意があつたことではなく、所在なさの氣まぐれでやっただからね！ で君のその友情にすがって、君の許しを乞うんだ、怒らないでくれ給え…… いやいや、それより今度が三度目



だ、髪毛をつかんで引ずり廻わしてくれ給え。しかし聴くだけは聴いてくれ給え。君あの豪華な装釘をした古いゴータ版の古典を憶えているだろうね？（いやあれを憶えないでおれるものか！）君もあの本によく見とれていたんだからね。それからテクストと註が半々に載ったシェークスピアも憶えているだろう？ それから……羊皮紙に刷った初版もののフランスの百科全書派の本も憶えているだろう？ それからこれも憶えているだろう……（むろん憶えているだろうが、——本當は忘れた方がいいんだよ！）……ここにカタログを入れて置くよ。これは僕が十字架を立てた本のカタログなのだ。墓場に立てるように黒い十字架を！ 聞いてくれ給え、そして僕を殴ってくれ給え、聖僧たちの作品は無事だ、神學の部はそっくり傷つかずに残っているよ。プラトン、スキヂウスなどの史家や詩人も無事だ。その代りスピノーザ、マキアヴェリその他約五十冊の作品は屑物になってしまったんだ……むろん僕の氣弱さと臆病さと、そして誣まべき信じ易さの故だ。

「それじゃ誰だ、そのオマール（第二の回数々主、文明開拓者の意）は誰だ？と君はきくだろう。それはマカール・ヴォーロホフという男だ。この男から見ると、この世には何ひとつ神聖なものはないのだ。エルジヴィル（十六、十七世紀のオランダの古典出版者）ものだって何だって、マカールは手に持ったが最後、ばりばり破ってしまうのだ。僕がそれを知ってぞっとした時にはもう手おくれだったが、この男は悪い癖を持っているんだよ。それは本を讀んでいる時に、讀んだところを引んめくってタバコを巻いたり、こよりを作って耳や鼻を掃除する癖なんだ。僕はその男の返す本が前より薄くなって

いるようにぼんやり氣ついてはいたが、それがどういふ譯だか永いこと判断がつかなかったんだよ。ところがとうとう僕の部屋にいる時、それをやっちゃったんだよ。用あり氣にアリストファンを取りあげたんだ。ギリシア語のテクストとフランス語の註を印刷してある本なのだ。そして僕の目の前で後の方からページめりめりとめくったんだ。あつという暇もなかったよ。このヴォーロホフはこの町の奇蹟なのだ。ここではあの男は誰にも愛されていない、みんなあの男を恐れているんだ。僕はどうかというと、僕はあの男を愛せずにおられないし、また恐れずにもおられないのだ。僕のハンチングを時々持って行って、喜んでいっているのだ。氣がつかずにいると、夜中にやって来て、窓からその帽子を差入れるのだ。かと思ふとひょっこり上等のブドウ酒の瓶を持って来たり、野菜を馬車一臺分もかついで来たりするのだ（あの男は菜園主のところの下宿しているのだ）。彼は警察の監視下に、當地に居住するように送られて来たんだが、それ以來この町も安全とはいえなくなったよ。

「頼むから、この僕の紹介状をあの男に見せないでくれ。きっと僕に何か悪戯するし、君にもするよ。僕はいいつの破った本について釋明を求めようと思つたが、向うで凄い顔付をして見せたので、僕はその話を續ける勇氣がなくなったよ。あの男は一頃僕らと同じ大學にいたが、科が別だったといっているが、多分嘘だろう。

「當地で判っていることは、この男がベテルブルグのある聯隊に勤務していたが、うまく行かないで、ロシア内地のどこかへ轉任させられ、辭職してモスクワに住んでいた時、何かの事

件に連座し、こんど當地に護送されて来て、上述の通り警察の監視をうけている——ということだ。この男は警察と永久的な敵對關係を持つて居るのだ。ニール・アドレーヴィッチや、タチャーナ・マルコヴァはあの男の話なんか聞く耳持たぬといった有様だ。だけどこの男の話なんかもうこれで澤山だ！自分でやって来て、どんな男か見たがいいよ。僕はこの告白をやったので、心の重荷がおりて、ほっとしたよ。もうこれだけいっておけば、君に會うのもそう恐くはないよ。

「親愛なポリース、やって来て、お祖母さんに會ってくれ給え。あのお祖母さんがどんなに君を愛し、君の本に對して僕のしたのと違って、どんなに君の地所を大切にしておられるかを君が見てくれたら！また君の妹さんのヴェーラ・ワシーリエヴァとマルファ・ワシーリエヴァは何というすばらしい美人ぞろいだろう！それがみんなどんなに君を待っていることだろう！君の庭は何という立派さだろう、ヴォルガの眺めは何というすばらしさだろう！……それを君が知っていたら、きつと一分の猶豫もなくやって來ることだろう。やって來てタチャーナ・マルコヴァから地所を引取り、僕からは書庫を引取ってくれ。やって來て、この罪を犯したが、君を愛している同級生であり幼友達である僕を罰し、また抱擁してくれ。

レオンチー・コズロフ

「家内から君によろしくとのこと。また彼女は昔の通り君を愛していて、君が來てくれたら一層愛するようになる、と傳えてくれといいつかつたよ」

ライスキーは涙をながさんばかりにして、この長い手紙を読み、奇人レオンチーとその愛書狂ぶりを思い出し、本のことを心配しているのを滑稽に思った。(あいつにくれてやるよ)とライスキーは考えた。

「レオンチー、お祖母さん！」彼は空想した、「美しい従々妹のヴェーロチカとマルフィンカ！ヴォルガ河とその岸。夢みるような恵まれた静けさ！あそこでは人間は生活しないで、植物のように成長し、静かにしぼんで行くのだ。あそこにはとげとげした毒のこもった悦樂を伴う嵐のような情熱はなく、苦しい疑問もなく、思想や意志の動きも少しもないのだ。僕はあそこへ行って、精神を集申し、材料を整理して、長篇小説を書きあげるのだ。しかし今は何とかしてソーフィヤの肖像畫を仕上げ、別れをつけて、とっとと出かけよう！」

## 第十七章

ライスキーは朝早くからソーフィヤの肖像畫にむかって仕事をしていた。彼がこんな風に朝から仕事に向うのも初めてのことではなかった。彼はこの仕事に苦しんでいた。肖像畫を見ていると、急にうんざりなつて、蔽いをかけ、部屋の中を歩きまわったり、窓際に立って口笛を吹いたり、指でこんこんとガラスをたたいたり、どうかすると中庭から飛び出して、にがりきつた不満そうな恰好で街を歩きまわることもあった。

あけの朝になると又同じ情景がくりかえされ、同じような不満と焦ら立たしさが起るのであった。時にはじっと腰をおろして、急にパレットを取りあげ、元氣よくちよいちよいと色を足したり、ぼかしたりして、じっと見つめて、考えこむ、それからだめだめと首をふり、溜息をついて、パレットを投げ出したりした。

ところがその肖像畫は、まるで瓜二つといってよいほど似ているのであった。みんなの見知っている通りの、悠容せまらぬ、輝くばかりのソーフィヤであった。本物と同じような調和のとれた輪郭で、あの通りの高く白い額で、開けっぱなしの處女のようにけがれを知らぬ眼差と、誇り高い首筋と、安らかな夢をむすんだ厚みのあるふくよかな胸をしていた。

彼女だ、彼女そっくりだ。しかもライスキーは不満で、藝術家の苦痛に苦しんでいたのだ！ 彼

は本物に生命をふきこみ、暗に火をつけた。彼女は動揺し、新しい生命の兆しを見せたが、この肖像畫にはそれが無いのだ！

（おやキリーロフはなぜ来ないのだろうか？ 約束しておきながら……あの男なら、この女神を女にかえすにはどうしたらよいか思いつくかも知れない）とライスキーは考えていた。

彼はパレットを指に持ち、頭をたれて、現在自分が夢に描いているとおりのソーフィヤをキャンパスの上に創造するための、藝術の祕奥をつかもうと、苦しい渴望を抱いて、また考えこんだ。ライスキーは彼女の昂奮を、「放ったらかして置いて下さい、あちらへ行行って下さい」といったあの祈るような聲を思い出した。ソーフィヤは自尊心を持ち出して助け舟にしようとしたが物にならなかった、彼の手から自分の手を引き抜こうとして、しかも引きぬけなかった、彼女は自制力を失ってしまった……それを彼は思い出した。あの時のソーフィヤとこの肖像畫とは何と違うだろうか！

ライスキーは自分がソーフィヤに疑惑を起させたこと、そしてそれがハムレット的な疑惑であったことを、自分の目で見取った。彼はソーフィヤの心のなかに、（私ほんとうに正しく生きているのでしょうか？ 私は何かしら人間的な、生き生きしたものを犠牲にして、自分の家系や周囲やこの禮儀に捧げているのではありますまいか？ 私だって正直なところ、時には伯母さまたちや、ババーや、Catherine と一緒にいるのが退屈なこともありますわ……ライスキー従兄さんだけが……）という疑惑を讀みとっていたのである。

ライスキーはソーフィヤの空想を自分の身にまで押しつけて行って、心臓がどきんとした。彼はもう肖像画を見ないで、なにかしら別のものを見ていた。兩眼は夢遊病者のように大きく開いて、またたきもせず、あらゆる方を見て、生きたソーフィヤを見つめていた。そこにはソーフィヤがひとり家において、深い物思いにふけりながら、彼のことを考えている。彼女は自分がどこにいるかも判らないでいる。かと思うとあてもなしに部屋のなかを歩き廻り、さっと射しこんだ新しい思想の光線に打たれたように立ちどまって、窓ぎわにより、帷をあけて、物珍しそうに街頭を見おろし、群衆の頭や顔が勢いよく流れるのを眺めている。しかしそれは彼女自身が群衆の一部となったように、鋭い目つきで社會の渦を見ても、その騒音にびくついたり、亂暴な群衆に肩をひそめたりしない。彼女はあのだこかの紳士があんなに遅れじと走っている行先を知っている様子である。彼女はその官吏は、年に二百ルーブルか三百ルーブルの金を貰って、人生の三分の二と、血と、頭脳と、神経を賣っているということを知っている模様である。

彼女はやっとの思いで袋を背にかついで行くひとりの百姓を氣の毒に思う。あの包を持った婦人はとっておきの外套を質に入れて、部屋代を作ろうとしていることなどを彼女は知っている。ひとりひとりの男と女を、ソーフィヤの物思わしげな、氣づかわしげな眼差しが見送るのである。彼女はいつまでもその人生をながめてどうやらそれを理解しているらしく、立ち去りかねた様子でカーテンもおろさずに、窓ぎわを離れる。彼女は一冊の本をとりあげ、ページをめくって、また世間の人はどんなに暮しているかと考えこんで行くのである。

彼女の美には思想がこもり、目はのんきな明るさを見せなくて、何か考えている。その目にはあの街を走って、悲しみ、苦しみ、働き、泣き立てている「世間の人」への心配がこもっている。

ソーフィヤは自分が人間の生活をしないで、植物のように伸び育ったということを、忽然と覚る。彼女は人生の渴望や、そのはつらつたる好意と悲嘆、それに勤勞の渴望を痛感するが、一番さきに立つのは好意の氣持である。

本は彼女の手から床におちるが、ソーフィヤはそれを取りあげようともしない。彼女はほんやりと花瓶の花をひとつむしり取るが、あとの花がばらばらになり、幾つかは散ってしまっても、それに氣づかない。

彼女は花の匂いをかぎ、物思いにふけりながら、ほんやりと唇で葉をむしり、何をしているのか殆んど無意識で、靜かにピアノの傍へより、横っちょに、投げやりな形で椅子に腰をおろし、片手で物思わしげな和音をならしつつ、じつと物思いをつづけるのである……

それから聖靈のように微かに、誰かの名をよび、はっとし、おずおずとあたりを見廻わし、兩手で顔を蔽うて、じつとしている。

部屋のなかには誰もいない、ただカーテンを開けたままの窓から日光がさしこんで、奔放に鏡にたわむれ、カットグラスに當って碎けるばかりである。開けたままの本は床の上どころがり、彼女の足もとには噛みすてられた木の葉が散っている……

ライスキーは繪筆をとり、むさぼるように眼を大きく見開いて、たった今自分の頭のなかで見

たばかりの、ソーフィヤを見つめた。それから微笑しながら、ながいことパレットの繪具を合わせ、何度かカンヴァスに筆をつけようとしては、決して決しかねて、思いとまるのであった。とうとう彼は兩の目に筆を入れ、陰影をつけ、少しまぶたを擴げた。彼女の目は廣くなつたが、まだ相變らず平靜なものであった。

ライスキーはそつと、殆んど機械的に、また目に筆を入れた。目はこれまでより生氣をおび、物をいうようになつたが、まだ冷めたかつた。彼は永いこと目の邊に繪筆を動かしていたが、やがてまた物思わし氣に繪具をませ、かつて中學時代に教師がライスキーの描いた生氣のない繪にやつて見せたように、片方の目に、ちよつと線を入れ、何氣ない線を入れ、それから彼自身にも説明のつかないことを、もひとつの目にもした……するとライスキー自身が、はつとたちすくむほどの火花がその二つの目からほとばしつたのである。

彼は少し離れて、繪を見直し、呆然となつた。その二つの目からまともに彼の上に光の束がおちて來たのだ。しかし表情にはまだいかついてものがあつた。

彼は偶然ともいえる無意識さで、かすかに唇の線を變え、上唇に軽い線を入れ、ある影をやわらげ、そしてまた離れて、見直した。

「彼女だ、彼女だ！」彼はやつと息づきながら、いった、「現在の、本當な、ソーフィヤだ！」ライスキーは背後に足音を聴き、さつとふり返つた。それはアヤーノフであつた。

「イワン・イワヌイチ！」ライスキーは莊重にいつた、「君に來て貰つて、實に嬉しかったよ！」

見給え、彼女、彼女だどう？ さあ、何とかいえよ！」

「待て待て、よく見せてくれ」

イワン・イワノヴィッチは永いこと繪を見ていた。ライスキーはいらいらして待つていた。

「これは誰だい？」アヤーノフが冷酷にたずねた。

ライスキーは呆然となつた。

「君はこれを見ても、ソーフィヤだと分らなかつたのかい？」やつと我にかへつて、彼はたずねた。

「どうしてソーフィヤ・ニコラーエヴナだというんだ？ そんなことがあるものか？」アヤーノフは目をいっばいに見張つて肖像畫を見ながらいつた、「だって君はも一つ描いていたんだらう、あの方がよかつたようだ、どこへやつたんだ？」

ライスキーはがっかりして、殆んど輕蔑をまじえて、手をふつた。

「ずつと同じものだよ！」彼はやりこめた、「やり直したばかりさ。どうしてそれが判らないのだ、ライスキーはアヤーノフに喰つてかかつた、「前のは生氣も、火の氣もなく、夢を見るような、だらしないものだったよ、それなのに今度のは……」

「そりゃ君の勝手だが、前の方が似ていたよ！」アヤーノフが頑固に反對した、「今度のは……彼女がまるで酔拂つているようだよ」

「當の君が酔拂つているんだ！ さあどき給え！」

「そりゃ僕には繪は判らないさ」、アヤノフが平氣で答えた。

ライスキーは返事もしないで、怒ったように肖像畫の髪やビロードに色を足した。

十五分後にキリーロフがやって來た。それはやせた小男で、顔全體が頬ひげや、口ひげや、顎ひげに埋っていた。地膚は殆んど見え、金壺眼だけが不自然にひかり、鼻が突兀として鋭い鉤をつくってひげやぶの中から飛びだし、尖端にいたって再びひげのなかにもぐりこんでいた。ひげの下には頬も顎も唇も見えなかった。首も顎ひげの下にかくれていた。あとの胴體は四角にぶら下っただぶだぶの外套の中に、まるで袋に入ったように包まれていて、その外套の下から油繪具だらけのバルトリーカフロックコート裾が見えていた。足には歩きたびに軟かい音の立つ變な靴をはき、帽子は胴が曲り、すりきれて、てかてかしていた。

あの物思わしげな打ちこんだ熱烈な目つきと、見通しもきかないほど濃いひげのやぶに蔽われた動きの少い嚴格な顔を見たら、ことに彼が自分の薄暗いアトリエで、パレットを手に畫架に對して、制作中の聖者の顔に釘のように粗暴で鋭い目を向けているのを見たならば、このキリーロフが人生の明るい面を探求する、小鳥のように自由な、世界的な藝術家だとは思わないで、彼自身を受難者か、藝術の修道僧で、喜びを憎み、悲嘆だけしか解しない男だと思ふであらう。實際、彼はそういう男であつたらしい。

彼は黙つて、ゆっくり、しかも深刻に肖像畫に打ちこんで行つた。ライスキーは不安氣にキリーロフの顔の表情を見まもつていた。キリーロフは初めのうちはびっくりして肖像畫の顔に目を

とめ、永いこと氣に入つたというやうな目つきで、肖像の目を見つめていた。顔の皺がのびたのである。彼は氣持のよい夢を見ている様子であつた。

やがて彼ははつと夢からさめた様になつた。彼の顔には喜ばしげな驚きではなくて、悲しげな驚きがだんだんと擴がり、額に皺がよつて來た。彼は傍をむいて、テーブルの上に帽子をおき、紙卷タバコを一本とり出して、火をつけた。

「いかがでしょうか？」ライスキーがたずねた。

「君はこの繪を見せようと思つて僕をよんだのですか？」キリーロフがたずねた。

「それで？」

「ごめん、私は家に歸らして貰います……」

「ちよつとお待ち下さい、何とかいって下さい」

「何をいうんです、空々しい！」

「ああ、その空々しいを聞くと、まるで空から落ちるやうな氣がしますよ！」ライスキーが氣を悪くして反駁した。「ああ、あなた方は死人だ！ セミヨン・セミヨノヴィッチ、あなたは前には僕が天分を持つてしていると認めておられたんじゃないやありませんか……」

「同じことを繰返して何になります！ 僕はもういつてしまったんだ！」彼は溜息をついた、「君がその道をたどつて、流行の看板繪に君自身を使つていたら……」

「流行の看板繪ですって！ 一體これは誰だか御存じですか？」

「誰だって？」キリーロフはさっと肖像畫をにらみ廻わして、繰り返した、「女優かなにかでしよう……」

「何を仰言るんです、あなた方は二人ともまるっきり氣が狂ったんですよ！　こちらはこの肖像を見て酔拂った女だというし、あなたは女優だというんですからね！　あなたの説教なんか聞いたって仕方がありませんよ！」

ライスキーは肖像畫に蔽いをかけようとした。

「あの人のところへ持って行きますよ。原物の方がもっとよく値踏みしてくれますからね。セミヨーン・セミヨーン・ヴィッチ！　僕はあなたからせめて挨拶の言葉くらい頂けると思っています。前には僕の作品にいつでも何か、生の火花なりとも見つけてくださったじゃありませんか……」

「ここにも火花はありますよ！」キリーロフは目や、唇や、廣く白い額をさしていった、「ここはすばらしいです、これは……　私は原物を知らないけれども、ここには眞實があると認めます。これは高尚な繪の、高尚な畫題となる値打ちがあります。それなのに君はこの目を、この情熱を、温みをそこの浮氣娘に、人形に、娼婦にくれてやったんです！」

「いえいえ、セミヨーン・セミヨーン・ヴィッチ、どんな畫家だってこの畫題より高尚なものは選べるものではありません。これは浮氣娘でも娼婦でもありません。あの人はあなたの繪筆で描いて貰ってもよい位の人です。それは端正な美と矜持の理想です。あれはオリムプスの女神です

が……あなたの種族です、つまりこの世の人間ではないのです！」

「この顔からその情熱的な渴望を除いて、祈るような緊張した目つきをつけたら……　ね、ボリス・パールグレイチ、この肖像畫を繪にやりかえませんか。君らの社交界や、馬鹿くさい女騒ぎをやめて……　窓にカーテンをかけて、三、四カ月とじ籠って見ませんか……」

「何をするんです？」

「祈る人間の像を描いて見給え！」キリーロフは顔をしかめていったものだから、鼻までひげに埋って、顔全體がブラシのように見えた、「こんなビロードや絹物なんか捨てちゃって、じかに岩の上に彼女を膝まづかせ、肩には地のあらいマントを着せ、手は胸に組ませるんだ……　それ、こう、ここんとここに」と彼は指先で頬のあたりに線をひいた、「光線も弱め、この肉はいらないし、目もやわらげ、臉もすこしふさぐんだ……　そしたら君自身も膝まづいて祈りたくありませんよ……」

「いやいや、セミヨーン・セミヨーン・ヴィッチ、僕は修道院に入りたくはありません、僕は人生を、光明を、喜びを求めているんです。僕は人間のいないところへは、決して一歩も行きません。僕は美を崇拜します、彼はやさしく肖像畫を見やりました。僕は肉體と魂とで美を愛します、そして正直なところ……」彼は滑稽なそぶりで溜息をひとつついた、「肉體で愛する方が多いのです……」

キリーロフは手をふって、部屋の中を歩きだした。

「君の才能は亡びかけていますよ。君は本當な道に這い上らないのです。君にはしつこさが足りない、情熱的なものと情熱はあるが、辛抱がない！ それここを見給え、手はちょっと目印がついたばかりで、間違っているし、肩は調子はずれた。それなのに君はもう繪をひろげ、人に見せよう、自慢しようとするんでは……」

「セミヨン・セミヨノヴィッチ、ぬたくるのが眼目じゃありませんよ！」ライススキーが反駁した、「御自分でもいわれたじゃありませんか、目と顔には眞實がこもっているって。僕も秘訣をつかんだような気がしますよ。髪や手なんか問題じゃありませんよ……」

「たくさん、たくさん、そんな誤魔化しは！」キリーロフが遮った、「君は手を描けないし、勉強する根氣もないんだ！ それ、この手をのばしたら、そちらの手より短くなりますよ。君の美人の正體は不具者なんだ！ 君はふざけてばかりいるけれども、人生も藝術も冗談は許しませんぞ。どちらも嚴格なものだ。だからこそ世の中には本當な人間も、藝術家も少ししかないんです……」

彼は溜息をついた。すると彼の顔は一段とひげの底にもぐりこんだ。

「それではあなたのいわれる通りだと、人生や人間から姿をかくし、しかめ面をして、決して笑わないでいると……」

「怒らないでくれ給え！」キリーロフが遮った、「君が藝術のなかで何でもよいから甘ったるい微笑やふくよかな肩よりもっと確りしたものを掴みたいなら、また裏口や酔っぱらいの百姓な

んかよりもっと純潔なものをつかみたいのなら、別館連や酒宴をやめて、素面になって、頭の中に霧がかけて、ぐらぐらなるまで仕事をし給え。倒れては立ちあがり、絶望のあまり死んだようになつて、また少しづつ元氣を取りもどし、夜中でも飛び起きて……」

「僕はそうしていますよ……殆んど……」ライススキーはいった、「ベッドから飛び起き、時には泣くこともあり、氣が狂うほど歩き廻ることも……」

「うち見たところ、あなた方はみんな氣狂いですな！」アヤーノフがのんきな批評を加えた。

「そうだ、君は飛び起きて、それ君の持つこの『眞實』をかいているのだ」とキリーロフはむき出しになったソーフィヤの肩を指さした、「いやいや、君は夜中に飛び起きて、この像をもの十回も描いて見て、遂に正しい像を作りあげなくてはいけない。それを向う二週間分の宿題として出して置くよ。そのうちに又來て見るからね。今日はこれで失禮するよ」

「待って下さい、先生、待って下さい！」ライススキーがとめた。

「放してくれ給え！ 君は藝術に對する尊敬を持っていない、自分自身を尊敬していない、キリーロフがいった、「藝術家の仲間とは同胞的な團結で、フリーメーソン團と同じく、全世界に散らばりながら、みんな同じ目的に向つて進んでいるのだ。藝術家は『石工』の親戚だ。ヒラムと彼の秘訣を考えて見給え。うん、そうだ！ 人生は享樂すべきものではないよ！ ふざけたり、訪問したり、ダンスをやったりして、その合間合間に小説や繪畫や彫刻を作つてはいけないのだ。いやいや、キリーロフは熱をこめて、亂暴ともいえる口調でライススキーに喰つてかかっ



た、「そんなキャンディーなんか棄てて終って、さっき君もうまいことをいったが、あの通り修道院に入って、すべてを藝術にささげ、祈りと齋戒をやり給え！ 蛇のように賢く、しかも鳩のように單純になり給え！ そして君の周圍にどんなことが起ろうと、人生が君にどんな誘惑をやり、どんな陥穴にはめこもうとも、ただ一筋の教義を忘れずに説き、ただ一つの感情を感じ、そして藝術への一筋の情熱を味い給え！ 咀われようが、輕蔑されようが、構わず藝術のために進み給え。そうなって始めて君の天職と奉仕がなすとげられ、『君の報いも多い』つまり不朽の作品が澤山できるのだ。ところが君は勇氣が足らず、力がなく、そのうえ貧乏も足りないのだ。地所なんか乞食にやっつて終って、創造の救いの光を追うて進み給え。今の君なんか、藝術の世界に入る資格はないよ！ 君は旦那衆だ、藝術の秣槽まきさかのなかで生れたのではない。絹のピロイドピロイドに包まれて生れたんだ。ところが藝術は旦那衆が嫌い、やはり『生れの悪い人間』を選んだ……そんな恥知らずな女にはカヴァーをかけ給え、でなければキリストの足もとに膝まづく娼婦に描きかえ給え。さよなら。二週間したら又來て見るよ」

彼はタバコを灰皿に投げこみ、帽子をつかんで、ライスキーが止める間もなく、姿を消した。「何という奴だろう！」アヤノフがいった、「變物だ！ 全くあいつなら修道院に入りかけているかも知れない！ 帽子は踏みつぶしたようだし、油繪具だらけで、乞食のようにぼろぼろしているよ。本當な受難者だ！ あの男は酒は飲まないのか？」

「水のほかには何も飲まないよ」

「それじゃ今に首をくくるか、氣狂いになるかだよ」

ライスキーは深く溜息をついた。

「そうだ、あれは最後のモヒカンの一人だよ」、彼はいった、「完全無缺な、卑屈にならない眞の藝術家だよ。藝術はあの高い階段の上から人間の群へ、つまり人生に降りて來るのだ。全くあななくちやならん！ 何という説教だ、あれは狂信者だよ！」

しかしライスキーはキリーロフのいった比喻をひきのぼして、心のなかで自分を天國に入り得なかつた青年になぞらえて見た。彼は物思わしげに部屋の中を行ったり來たりした。

彼は意氣銷沈し、心のなかに涙がいっぱい溢れて來た。その瞬間の彼は本氣ですべてを投げうち、沙漠に行つてしまひ、キリーロフのようにぼろぼろの服をまとい、一皿料理を食つてすごし、ソーフィヤのように人生の蔭にこもり、そしてぶっ倒れるまで繪具を塗つて塗りまくり、ソーフィヤを娼婦に作り替える覺悟であつた。

彼は張つたばかりのカンヴァスを急いで取り出し、畫架にのせて、肉太に祈る娼婦のデッサンを始めた。彼はその娼婦に腕をつけ、思ひきつて、殆んど憤激をこめて、指を描いた。消しては描き、描いては消したが、どうしても物にならなかつた！

彼はいら立って來た。そのいら立ちは、デッサンが巧く行かなかつたとたん、忿瀆ふんぷくに變つた。彼は消して、こんどは濃いはつきりした線で、カンヴァスも破れよとばかり、ゆっくりと描いて行つた。さっきキリーロフのいった絶望が、もう忿瀆に變りかけたのである。

ライスキーはチョークを置き、指のよごれを髪毛にこすりつけて、ソーフィヤの肖像の前に立った。

(この肖像畫をやり直すのか!)彼は考えた。(キリーロフのいうのが本當だろうか? 僕の目的は、使命は、イデアは美じゃないか! 僕は彼女の虜となり、僕を支配するあの輝くばかりの美を具現しようと思うのだ! 僕がその美の『眞實』をつかんだとしたら、それ以上に何が要ろう? いやいや、キリーロフは天上に美を求めている。あの男は禁慾主義者だ。ところが僕は美を地上に求めているんだ……この肖像畫をソーフィヤに見せよう、あのひとは何というか知らず? その上でやり替えるとしよう……ただ娼婦にだけは描きかえる譯には行かんぞ!)

彼はキリーロフのあの考えを知らせたら、ソーフィヤが何というだろうかと考えて、にやりと笑った。彼は肖像畫の中の「眞實」に見とれているうちに、次第に落ちついて来て、またもとのままの奔放な空想と、奔放な藝術と、奔放な勞作にもどって行った。彼は注意ぶかく肖像畫を包んで、ソーフィヤの家へ持って行った。

## 第十八章

ライスキーは彼女に會えるかどうか、また何をどんな風に話すのか、信ずるでもなく、信じないでもなかった。

(何てここが湧きたつのだろう!)と彼は自分の胸をおさえて、考えた。(おお! 嵐よ來れ、神よ嵐をあたえ給え! 今日決定的な一日だ。今日こそ祕密が明るみに出るのだ。そして僕は知るのだ……彼女が愛しているかどうかを! もしイエスなら僕の生活は……いやわれわれの生活は變えねばならないし、僕は行かないことにしよう……いやいやわれわれが二人でお祖母さんのいる片田舎へ行くことにしよう……)

彼は肖像畫の包みをとぎ、客間の安樂椅子の上に置いて、澤山の部屋が列を作った廊下を靜かにソーフィヤの部屋へ行った。彼は伯母たちが教會の祈禱に出て、ソーフィヤが一人でいるということを、もう下で聞いて來ていた。

彼はどきどきしてくるなと祈るように、心臓をおさえて、爪先だつて歩いて行った。彼はずつと散らばった花や、まき上ったカーテンや、切子グラスに戯れる奔放な光線を夢見るように想像して行った。彼はそつと忍びこんで、ソーフィヤを見つけた。

彼女は机に肘をつき、片手の掌に顔をのせて坐って、空想か、居睡りか、……泣くような恰好

をしていた。彼女は朝の普段着で、ごわごわした鎧のような服をまとわず、レースも腕輪もつけず、髪さえ解いていなかった。髪はさりげなく、ヘーヤネットの中にたばねてあった。ブルーズは肩からすべり落ちて、大きな波をうって足下に擴がっていた。絨氈の上には緞子の部屋履がころがり、足は靴下一枚でピロイドの長椅子の上ののっていた。

ライスキーはこんな恰好をしたソーフィヤを一度も見たことがなかった。彼女は彼に気づかず、彼は息をつくのさえ恐れていた。

「Sophie!」彼はかすかに彼女の名を呼んだ。

彼女はぶるっと身慄いし、少しよたよたとなってテーブルから身をひき、びっくりしてライスキーを見つめた。彼女の目には、いったいこの人はどこから、どうして、何のためにやって来たんだらうという疑問が浮んでいた。

「Sophie!」彼はくり返した。

彼女は立ちあがって、しゃんと姿勢を正した。

「どうなさいまして、cousin」彼女は手短かにたずねた。

「失敬しました」ライスキーはもう歡喜の氣持を失っていった、「僕は思いがけもなく、こんな詩的な亂雑さのなかで、あなたをお見かけしたのです」

彼女はあたりを見廻わし、はっと氣づいた風で、ベルをならした。

「Pardon, cousin, (失禮します) いま服を替えて來ます!」彼女はそっけなくいって、召使をつれて

寢室に入った。

ライスキーの來たことをなぜ知らせなかったのか、と行ってソーフィヤが小間使のパーシャを怒りつける聲を彼は聞いた。

(これは一體何だ?)とライスキーは自分の持って來た肖像畫を見ながら考えた、(彼女はまたこれと違っている、何から何まで昔の通りだ!……いやいや、だまされるものか。いま僕の目の前で取りつくろっているあの平靜さも、冷たさも、昔の冷たさではない。おお、斷じてそうじゃない! あれは無理にとつてつけたものだ。あの氷の下には何かかくれているぞ、見とどけてやろう!)

とうとうソーフィヤは髪を結って、しゅうしゅう鳴る服をまとって出て來た。彼女はライスキーの方を見ないで、鏡の前に立って、腕輪をはめた。

「あなたの肖像畫を持って來ましたよ」

「あらどこに? 見せて下さい」彼女はそういって、彼について客間へ行つた。

「あんまり私を持ち上げていらっしゃるわ、私こんなじゃありません」彼女は肖像畫を見ていった。

「ああ、飛んでもない、僕は餘りに眞實から遠いのです!」ライスキーは目の前に實物を見て、眞底から意氣銷沈していった、「美というものは何という強いものでしょう! ああ僕がそんな美を持っていたら!……!」

「何をなさいますか？」

「何をするかというんですか？」彼は狡い目つきでじろじろと彼女を見ながら、相手の質問をくり返した。「誰かを大變幸福にしてやりますよ……」

「そして千人も不幸な人をお作りになるんですよう、え？ 誰彼の容赦なく、みんなに御自分の力試しをなさるんですよう……」

「ああ！」ライスキーは相手の尻尾をつかまえた、「あなたがそんなに近づき難く見えるのは情け深いからではないのですか？……あなたは自分の眼差しが誰ひとり只では済まさないことを知っておられるので、無駄に目を動かすことを恐れているんです。これは新発見のすばらしい特徴だ！ その自信は實にあなたに似合いますよ。そのプライドは家柄の権柄より立派だし、美貌は力で、プライドには意味がありますよ」

ライスキーはソーフィヤが頑固に自分から逃げる理由が判り、急にあの空想的なポーズを変え、再び自分の軀殻に入りこんだ理由を發見して、喜んでいた。

「だけど餘り慈悲心を見せるものではありませんよ。だってあなたに近づき、あなたと話をするためなら、誰だってその慈悲を拒む者はありませんからね！ 誰だってあなたの後なら這いつくばって、大地の果までも歩いて行きますよ。それも凱歌をあげようとか、幸福や勝利をおさめようというばかりではなくて、ただはかない勝利の望みがあるからに過ぎないのです……」

「もうお止しになって下さい、また御自分のことばかり仰言つて！」彼女はいったが、全然無

關心な調子ではなかった。彼女は自分はそのんなに強いのだろうか、誰でもこの熱中した、熱烈な、半氣狂いの藝術家と同じように自分の後を這いつくばって歩くのだろうか、と迷っている様子であった。

ライスキーはそのデリケートな迷いの影も見のがしはしなかった。彼は彼女の目を、言葉を見廻し、彼女の心にちらちらと浮ぶ光と影をすっかり見抜き、彼女の腹のなかで起ったことはおろか、起るべかりしことまで、理づめに洞察するばかりでなく、勘でさどっているようなものであった。

「あなたは自分でも見て知っているじゃありませんか、ライスキーは續けた、「特別の意味もなく向けたたつたひとつの優しい眼差しや、報酬の約束もないたつたひとつの言葉のために、みんなが走り廻り、騒ぎ廻って、あなたの氣を惹こうとするのを」

「まさか？」

「それじゃ氣がついていないのですか？ もうそんなに白を切るのはお止しなさい！」

「ほんとに少しも知りませんわ」

「ほんとにあなたは氣づいていて、腹の底で凱歌を奏しているのです。それどころかあなた自身のことをこんな風にいわせて、僕を嘲笑しているんです。あなたは僕が眞實をいっていることを知っていて、僕の言葉のなかに自分の姿を見て、それに見とれているんです」

「今までのところでは私は肖像畫のなかに自分の姿を見ただけのこと、それも誇張したものでした。それに言葉の上ではあなたは怒鳴りつけてばかりいらっしやるわ」

「いやいや、肖像畫は貧弱な、生氣のないコピーにすぎません。本物はあなたの目の光と、あなたの微笑だけです。それも年がら年じゅうではありません。あなたはおっかなびっくりで、めったなことではこんな風に見つめたり、笑ったりすることはありません。しかし時々それがちらりと見えるのです。一度それがすらりと浮んだので、僕はそれをつかんで、ほんの眞實の暗示みたいなことを作ったのですが、出来栄は御覽の通りですよ…… ああ、あの時のあなたは何という美しさだったでしょう！」

「それは何時のことでしょう？」

「それこの部屋であなたとお話をしたじゃありませんか…… それ、憶えているでしょう、あなたのパーがああミラリを連れて来たでしょう……」

彼女は黙っていた。

「ミラリですよ？」彼は繰返した。

「憶えていますわ」彼女はそっけなく答えた。

「どうです、あの人はよくやって来ますか？」ライスキーは相手の語調のそのそっけなさにも氣づいて、たずねた。

「ええ……時々。あの方はとても歌がお上手で……」彼女はこういい足して、光に背をむけてソファーに腰をおろした。

「あの人の来る日に僕も寄って見たいですな…… 知らしてくれませんか」

「この部屋は寒いわ！」彼女は肩を動かして、苦情をいった、「暖爐に火をたかせなくちゃ……」  
「僕はあなたにお別れに来たんです。僕は旅行に出るんです、知っているでしょう？」彼は相手をみつめたまま、不意にいい出した。

彼女は平氣なもので、

「どちらへ？」とたずねただけであった。

「田舎のお祖母さんのところへ行きます…… 僕がいなくてもあなたは心残りはありませんか、淋しくはありませんか？」

彼女は考えて、ひとり合點でこの質問を解いている様子であった。

「ねえ、僕としてはそこに或る種の動搖があつて、あなたが口をつけてイエスもノーもいわなかっただけでも、幸福なのです。突然にイエスといわれるのは嘘か、お情けであり、そうでなければ僕の身に餘る幸福なんです。またノーだったら僕として辛いのです。だけど當のあなたは心残りがあるかどうかを知ってはいないのです。それはあなたに期待をかける人間にとっては、大したものですよ、半分の勝利ですからね……」

「それじゃあなたは完全な勝利を望んでいらっしゃる？」彼女は微笑をうかべてたずねた。

「將軍になる見込みを持たぬ弱卒だといいたいところですが、そうはいいません。だってそれは餘りに……不可能なことです」

ライスキーはソーフィヤを見つめて、相手が「なぜ？」と聞いてくれたらと心のなかで念じ、

それさえ聞いてくれたらどんな犠牲も惜しまないと思っていたが、彼女はたずねなかった。彼も溜息をかみこころした。

「不可能なんです」、ライスキーは繰返した、「そして僕がそんな大それた希望を持っていないことを証明するために、こうしてお別れにやって来たんです、これは永の別れになるかも知れないのですが……」

「あなたお氣の毒ですわね」彼女は突然そっと、軟かい調子で、情をこめていった。

彼ははっと彼女の方をふりむいた。それは齒痛に悩んでいたのに、急に痛みがとれた人のようであった。

「お氣の毒！」彼はくり返した、「本當ですか？」

「本當ですとも。私が決して嘘をつかないのは御存じじゃありませんか」

彼はソーフィヤの手を取って、感激をこめて接吻した。彼女はその手を引っこめなかった。

「それこんなにあなたの手を接吻する権利を得ようとして、あなたの周囲にむらがっている連中はどんなことでもするんですよ！」

「それじゃ、あなたは幸運な方ですわね、自由にそんな権利を使っていらしやるんですからね……」

「ええ、ひとりの従兄としてね！ だけど僕は」と彼は酔ったような目つきで相手を見つめていった、「この手をもっと別のやり口で……それこんな風に接吻できるのだったら、何でも惜し

くはありません」

彼は接吻しようとしたが、ソーフィヤが手を引っこめてしまった。

「僕はああなたが少しばかり僕を可哀そうだと思っていられることを疑うことは出来ません……」彼は續けた、「だけどそれが何故であるかを知りたくて堪りませんよ。なぜああなたが時たま僕と會いたがっていられたのかとそれが知りたいのです」

「あなたのお話を伺うためですわ。あなたはむしろ大變に誇張したお話をなさるけれども、私が理解していながら、自分ではいえない、話せないような事柄を、時々とてもはっきりと説明して下さるんですもの……」

「ああ、とうとう白状しましたね！ それじゃ僕があなたに必要な理由と云ったら、つまりアラビア語の辭書を覗くように、僕と話をしたんですな……羨むに當らない役目だ！」彼は溜息まじりに附加えた。

「だってあなたはたった今そう仰言ったじゃありません？ 將軍になる見込みはないし、また誰だって私の氣をひくためならどこやらまでも……這って行きかねないんだって……私そんなことをしろといはしませんけれども、少しでも……示して下さるなら……」

「友情ですか？」ライスキーがたずねた。

「ええ」

「そんなことだろうと思っていましたよ。ああ、この友情という奴が！」

「いえいえ、お見受けするところ、あなたはまだ『將軍の位』をあきらめていらっしやらないようですね……」

「いやいや、僕はそんな野心は持ちません、だから一度いいますよ、僕は旅行に出ますって。しかしあなたもいいましたね、僕がいないと淋しくて、物足らないって。だから僕は溺れる者は薬をもつかむで、その言葉にしがみついたのです」

「それも無駄じゃありませんわ。だって私無駄な飾りものではなくて、友情を申し出ているんですもの。たった一つのやさしい目つきや言葉を得たいばかりに、大地の果というような遠いところまで這い廻ると仰言るんですもの、私が誰にもめったに見せない友情を申出るのでしたら……」

「友情というものは立派なものですよ。ただそれは友情が戀愛の第一歩である場合で、そうでなかったら友情なんて愚劣なもので、屈辱でさえありますよ」

「どうしてそんなことがありますか？」

「そうですとも。あなたは案内も乞わずに自分の部屋まで入って来ることを僕に許しているけれども、それもいつでもそうして構わない譯じゃないのです。今日なんか怒ってしまったじゃありませんか。それから色々の頼みをして町じゅう走り廻らせるのです。それは従妹の特権です。そして僕に趣味があれば、どんな着物にしようかと相談もなされるし、あなたの親戚や知人について、正直な批評もお聞きになるし、とどのつまりは一つの屈辱になって終うのです……つまり

あなたが戀をした時に、心の底の祕密を僕に打ちあけるようになるのです……」

ソーフィヤの顔には聞くに堪えないことをじっと我慢して聞いているといった表情が浮んだ。

彼女は顔をそらして、そっと欠伸までして見せた。彼はそれを見とがめた。

「あなたはもう戀をしているんじゃないか？ ありませんか？」 彼は不意にたずねた。

「あらどうして？」

「そんなにどきまぎしたのはどういう意味です？」

「どきまぎですって？ 私がどきまぎしましたって？」 彼女はそういって鏡をのぞきこんだ、「私どきまぎなんか致しませんわ。ただ二人で戀の話をしたくないと約束したことを思い出したまでですわ。どうぞあの約束をお忘れにならないようにお願いします」、彼女は急に眞面目になつて附け加えた、「どうぞその話はしないことに致しましょう」

彼はその願いを聞いてびっくり、考えこんだ。彼女は前にもそう頼んだことはあったが、それは冗談半分に笑いながらのことであつた。彼の自尊心は驕いた。(俺はびったりと彼女の心を打診したんだ。彼女の心はそれに反應を見せて、あのどきまぎして突然戀の話をしてしないでくれとばつの悪い頼み方をしたのもそれを恐れる用心ぶかさだ)と。

それからライスキーはその考えをすて、(俺は獨りよがりの色男だ)と自覺して赤面し、別の原因をさがし始めたが、心はうずき、苦しみ、張りさけんばかりになつた。眼は疑惑をこめてソーフィヤの顔をのぞきこみ、言葉は口の先から湧き出るばかりで、辻つまが合わなくなった。彼は

もう嫉妬にかられていた。

（これは一體何ということだ？ 俺は本気で惚れこんだのだろうか？）と彼は考えた、（俺とすることが何というさまだ？ 俺は何も自分のためにあんなに骨を折ったのではないのだ。この女のために……成長のために、『社會のために』骨を折っていたんじゃないか。もいちど最後の努力だ！……）

「では最後の質問をさせて下さい」、彼は口に出していった、「もしもですわね……」それから彼は考えこんだ、これは天下分目の質問だったからである、「もしも表彰状としてあなたの下さるその友情を受け容れて、その上で『將軍になろう』という仕事を始めたとしたら、あなたは何かいいいます？ 僕はそんなことが出来るものでしょうか、してもいいのでしょうか？……」（この女は娼婦じゃないんだから、本當をいうぞ！）と彼は考えた。「あなたはこんな希望を支持してくれますか？」

彼は慄えながら最後の言葉を吐いてしまって、彼女の顔を見るのを恐れていた。彼女は笑い出した。

「あなたは何の望みもありませんよ」、彼女は平然といき言った。

彼はその言葉には疑問の餘地もないといわんばかりに、いらいらした身ぶりをした。

「望みはないし、また有り得ないのですま！」彼女は斷然と繰返した。「あなたは何でも誇張なさるんです。單純な親切もあなたの目には何か特別の *entertainment* (愚談) のように見えるし、

ただの氣づかいの中にも情熱を見て、獨り合點に酔拂っていらっしやるんですもの。あなたは一人の従兄としてまた友だちとしての役割の埒を越えていらっしやるんですよ。こんなことをいって悪いけれども……」

「それじゃあなたは僕を世間なみの色男や女たらしと同じにしているんですか？」

「Ei, quelles expressions !」(ちよー何と云う表現さ！)

「そうですね、あなたは僕をあの客間から客間へ、棧敷から棧敷へ渡り歩いて、見せかけの優しい目つきを作り、熱をこめた丁寧な文句をはき、教えこまれた通りのウィットをふり廻わす連中と一緒にしているんです。いやいや、違います。もしも僕が何か自分のことをいい出す時には、それは僕の心の中にあるものをいうのです。僕の舌は心の聲を正しく傳えます。僕は自宅に出入するようになって、もう一年になります。僕は歸って行く時にはいつも心の中にあなたを抱いて行き、自分の感ずることは何でも表現することが出来ますよ」

「なぜ私にそんなことを仰言いますの？」彼女は不意にたずねた。

ライスキーはその「なぜ」という言葉にがちんと打ちのめされて、口をとじた。そのなかには「將軍の位」につく見込みがあるかという彼の質問に對する返事がすっかり入っていた。だから彼としてはもう澤山で、これ以上質問する必要はなかったが、彼はたずねたのだ！

「あなたは……僕を愛していないんでしょう？」彼はそっと耳うちするようにたずねた。



「とても愛していますのよ！」彼女は陽気に答えた。

「冗談をいわないで下さい、後生だから！」彼はむかむかしていった。

「誓いますわ、これは冗談ではありません」

(あなたは僕に惚れていますかなんて聞くのは愚劣だ、餘りにも愚劣だ)、と彼は考えた、(むしろ何にも知らずに行つた方がいいよ。いくら貰つたつたつたねるものか……だが待て、「世間並の情熱を超越して」なんていっている癖に、そこらの娼婦と同じように小智慧を働かして、いいのがれたり、すり抜けたりしているじゃないか！ だけど俺はつきとめてやるぞ！ 俺の心のなかにあるものを、思いがけもない時にぱつと打ちまけてやるぞ……)

この心のなかの獨白の間、彼女はずるい微笑をうかべてライススキーをながめていた。ライススキーをいじめる快感もまんざらではない様子で…… 相手さえ思いがけない質問を「打ちまけ」なかつたら、本當にいじめつけたに違いなかつた。

「あなたはあのイタリア人のミラリ伯を愛しているんでしょう、え？」彼はたずねて、びたりとソーフィヤをにらみつけた。そして自分の顔色が蒼くなり、一瞬間に何萬貫の重荷を背負い込んだことを、自分でも感じた。

微笑も、仲好しの口調も、自由なポーズも、——この質問をきくと、彼女のなかからすっかり消えてしまつて、彼の目の前には冷たく、きびしく、よそよそしい一人の女が残つた。あんなに近しかったソーフィヤが、今では大變に遠く高いところへ行つてしまつて、親戚でも、仲よしで

もなくなつてしまつた。

(きつと本當だつたんだ、俺の考えが當つたぞ！)とライススキーは考えて、それからどうしてこの謎がとけたか、何が手掛りでこんなに解けたのかと、それを分析して見た。彼はそのミラリをソーフィヤの家で一度見たきりであつたが、そのミラリの話が出た時、ソーフィヤの顔にちらりと動く影があつたし、また彼女は坐りなおして、光に背を向けたのであつた。

(ああ！ 僕はどうしてこんなに何でも見えて、他の連中のように盲の幸福を味えないのだらう！ なぜ僕にはちよつとした衣ずれの音や、かすかなそよ風や、沈黙だけで、何でも判るのだらう？ 呪わしい嗅覺だ！ もうこうなれば僕の心には毒が入つたんだ、こともあろうにこんな幸福の絶頂から！)

彼女は黙っていた。

「氣を悪くしたんですか？」

彼女は黙っていた。

「いって下さい、そうでしょう？」

「御自分で知つていらつしやるじゃありませんか、そんな當てすつぼうがどんな結果になるのか」

「僕はもっと澤山知っていますよ。僕はあなたが氣を悪くした理由も知っていますよ」

「教えて頂きたいわ」

「それが本當だからですよ」

ソーフィヤは「あら、まだそんなことを頭張りになります！」といわんばかりの、驚いた身ぶりをして、彼を見つめた。

「あなたのその目つきも、自分のものではなくて、借りものですよ！」

「あら私が白をきっていますって！ ムッシュュー・ライスキー、あなたは大變に御自分の名譽を高めていらっしやいますこと！」

彼は、笑って、やがて溜息をついた。

「もしそれが嘘だとすると、……僕の判じのどこが氣に觸るんです？」彼はいった、「また本當だとしても……何も氣に觸ることはないじゃありませんか？ このヂレンマをひとつ考えて下さい。そして自分の威嚴をかさにきて、哀れな從兄を壓殺しようとする無駄骨を折ったのだと覺つて下さい！」

彼女はちよつと肩をすくめた。

「ええ、そうですとも。そして今あなたの上で、屈辱を現わさないで、あなたの秘密をかすめ取られたことに對する口惜しさを現わしているんですよ……そして屈辱そのものも一つの化面にすぎませんよ」

「何が秘密でしょう！ 何を仰言るんです！」彼女は聲を高め、目を大きく見開いていった。

「あなたは從兄の權利を悪用していらっしやるんです。そこに一切の秘密があるんですわ。私う

っかりもので、伯母さまやパパの留守にも、いつもお目にかかっていましたのよ……」

「ねえ、そんな調子はやめて下さい！」ライスキーが親しげに、熱をこめていい出した。それは眞心がこもっていたので、彼女も氣がほぐれて、だんだん昔の通りの氣樂な、信じきったポーズに變り、もしそこに秘密があったとしても、その漏れた先は悪い人間ではなかったと覺つた様子であった。

「ああオリムプスの山とはこんな意味があるんですよ！」彼はつづけた、「あなたが女神でなくて、ただの女だったら、あなたは僕の立場を理解し、僕の心のなかを見ぬき、こんなに態度を變えないでしょう。かりに僕があかの他人であっても、もっと容赦のある態度をとられるでしょう。まして僕はあなたの近い人間なんですからね。あなたは僕を友だちとして愛し、僕がいないと淋しいといいましたね……ところが女というものは自分の愛する人に對してだけ思いやりがあり、優しく、誠實で、正義感を守るけれども、他の者には容赦なくなるものです。秘すべき愛と秘密を持った女に宥して貰うのは、刀をふりかざした悪漢の宥しを乞うよりもっと難しいことです」

「いったい何のためにそんなことを仰言るんでしょう！ 私にならそんなお話は全く見當違いですわ！ それに戀の話や、情熱の話はやめにして頂くようにお願いして置いた筈ですよ……」

「判っていますよ、その理由も判っていますよ。僕はあなたの傷口に觸っているんです。ただ僕はこの親密な觸り方がそんなに亂暴なんですよ……僕はそんなに信頼に値しない

人間でしようか？……」

「どんな信頼でしよう？ どんな秘密だと仰言るんでしよう？ 後生ですから……」といって、彼女は行って終いたい、耳をふさいで、知りたくも、聞きたくもないといった様子で、不安氣にあたりを見廻わした。

「かりに『將軍』になりたいという野望を持った僕は滑稽に見えることではしょうがね、彼の相手の言葉も聞かずに、熱をこめて優しく續けた、「しかしですね、僕はあなたの目から見ても幾らかの値打ちはある、そうでしよう？ いや、それ以上だと僕はいいですよ。あなたの一生を通じて、あなたの周囲には僕より近い人間はいなかったし、今もないし、將來も恐らくあり得ないでしよう。あなただって、さっきこんなにはっきりではなかったが、これと同じことをいってたでしょう。あなたの側には僕ほど人間と心を知って、あなた自身を説明してやれる本當な生きた人間がいなかったのです。あなたは僕のなかに自分の考えを讀み、感情を確かめているのです。僕は伯母さんでも、パパでも、御先祖でも、御主人でもないのです。そんな連中はひとりも人生を知っていませんでした。あの連中はみんな竹馬にのり、古い頑固な概念や、約束ずくの教養や、いわゆる『節度』の殻にとじこもって、乞食のようにそれを食って生きて來たんです。僕は生きた、新鮮な人間で、この家には未知の概念と感情をあなたのところへ持って來ます。僕はあなたにとって一つの新しい存在です。だって僕はあなたを理解し……いやこれは失禮、あなたのお相手をしていたんです……」

ね、そうでしよう？」

彼女は黙っていた。

「今では、むろん話は別です。だってあなたは僕が旅行に出るのを喜んでいるんだから、僕は口をついでいった、「ほかの者はみんな残っても構わないけれども、あなたには僕ひとりが旅行することが必要なんです……」

「どうしてでしよう？」

「それは僕ひとりが今の瞬間には無用な人間だからです、僕ひとりが芽生えかけたあなたの秘密を見破ったからです。だけど……もしあなたがその秘密を僕に打ちあけて下さるなら、僕はあの次に誰よりもあなたに親しい人間となるでしよう……」

彼女は身じろぎをし、立上って、部屋の中を歩き廻わり、壁や肖像畫をながめ、長くならんだ部屋の列をはるかに見やっつて、（もうこの立場から逃げ出す道はない）とさとったらしく、いららと安樂椅子に腰を下した。

「しかし……」彼はまた優しく親密な聲でいい出した、「僕はあなたを愛していますよ、（彼女はしんと身を起した）、「精いっぱい愛しています、そして何よりもあなたのその壓倒的な美しさの故にあなたを愛します。あなたは無意識のうちに僕を支配しておられるのです。あなたは僕を何とでも作りかえることが出来るし、またそれを知っているのです……」

「ちょっと…… あなたは何か情熱みたいなものを持っていらっしやることを……私に信じこませようとしていらっしやるようですわね……」彼女はライススキーの押し強い分析をわきにそら

せて消しとめようと、一步ゆずったいい方をした、「だけど御覽なさい、あなたはそれは無意識かも知れないけれども、……嘘をいっていらっしやるんじやありませんか?……」彼女は相手が奔一流のような獨白をやり出しそうな雲行を見て、「こう附加えた、一、二カ月前までは何のこともなく、小さな發作みたいなものばかりでしたのに、急にこんなに早く……あなたの喜びようも苦しみようも不自然だと思いはなりませんか。すみませんけれども、私はそのあなたの喜びも苦しみも信用しておりませんのよ。だからこそあなたの求めていらっしやる手加減なんか出来ませんわ。それは何でもお好きになさって構いませんけれども、私としてはあなたを従兄弟の數からはずさねばなりませんよ。あなたは一番危かしい従兄であり、お友だちなんですもの……」

「情熱は何年もかからねば出来ないものではありません。情熱は一瞬のうちにも出来るものです。だけど僕は何もあなたに情熱を吹きこもうというのではありませんよ、彼は元氣のない調子で附けたした、「しかし僕がいま昂奮しているということなら、僕は何も嘘はいいませぬよ。また絶望のあまり死んで終うとか、この問題は僕の死活の問題であるなどということは、もういいません。いやいやそうじやありません。あなたは僕に何ひとつくれなかつたし、また僕から取り上げるものも何ひとつありませんよ。もっとも僕が勝手に作りあげていた希望だけは別ですがね……それはひとつの感覺であって、間もなく消えてしまいます。僕はよく知っていますよ。印象は榮養不良のため、ちんちんと根をおろさなかつたのです。これも有難いことですよ!」

彼は溜息をついた。

「あなたは何を希望になりました?」彼女がたずねた。

「僕はあなたのハートを覗きこんだのだといって、あなたに恐がられることに屈辱を感じているんです……」

「私の心のなかには何もありませんわ」、彼女は一本調子に答えた。

「あります、あります、だからそれだけの信頼にも値いしないのが僕には辛いのです。あなたは僕がその秘密を腹のなかに藏っておけないのだと恐れているんです。僕としては自分の目があなたをおどしついたり、恥かしがらせたりするのが辛いのです……ああ、ああ!、それが僕の職分であり、仕事だったのに、僕は……あなたを暗黒な盲目状態から引き出して、却って悪いことをしたことになりますよ……あのミラリは……」

ソトフィヤはかなり平靜に彼の言葉を聞いていたが、最後のミラリといふ一語を聞くと、すつくと立ちあがった。

「もしも今でも私の友情を少しでも大切に思っただらしたら、彼女はいいだしたがる、その聲は少し變つて、慄えるようであった、「そしてここにおいでになって……私とお會いになることがあなた様から見ても何かの意味があるのですしたら……もしそうでしたら……その名はいわないで下さいませ!」

(そうだ、全くだ、僕の考えた通り、この人はあの男を戀しているんだ!)とライスキーは斷

案を下した。すると彼は気が楽になった。すっかり望みの綱がきれ、問題の解決がつき、秘密が明るみに出たとなると、ライスキーの心の痛みも消えてしまった。彼はもうソーフィヤをも、ミラリをも、そして自分自身までも客観的に横から観察するようになった。

「恐がらないで下さい、後生だから恐がらないで下さい」、彼はいった、「友情というものはいいものですよ！ スパイのように恐れたり、恥かしがったり……」

「私は何ひとつ、誰ひとり恐がったり、恥かしがったりすることはありませんわ！」

「何ひとつないとは何ということですよ！ 日の光は、あの人たちは恐くないのですか！」彼は祖先の肖像畫を指さした、「それあんなに目をむいて見えていますぞ！ だけど僕はまさかあの連中と同じものじゃないでしょう？ 僕はまさか日の光ではないでしょう？」

「本當をいうと御先祖には恐いところがありますわ！」ソーフィヤは至って氣樂に平氣な調子でいった、「それはあの御先祖たちがあなたの話を聞いたり、見たりした場合のことですわ！ 今日はいろんなことがありましたわね！ 詰問もあれば、*declaration* (告白) もあれば、嫉妬もありました…… ああ *cousin* ……」彼女は例の軽く嘲弄したような平靜な調子をとりもどし、快活な溜息をまじえて、言葉を結んだ。

全く彼女は何ひとつ恐がったり恥かしがったりすることはなかったのだ。ミラリ伯は六回ほどやって来たが、いつでも他の人と一緒に、歌を歌ったり、彼女の演奏を聞いたりしても、話はいつも世間なみの禮儀と、やっとなみとれる位にデリケートでつつしみ深い稱讚を匂わせる範圍を

超えないものであった。

他の女なら大っぴらに美男子ミラリの名をよび、彼の注目をひいたことをひけらかし、少しはミラリに秋波も送ったであろうが、ソーフィヤは却ってその名をいうことさえ止め、ライスキーが見當ちがいの「秘密」をかぎあてたといいい出した時には、その口をふさぐ術も知らない程であった。

そこには何の秘密もなかった。だからソーフィヤがその判断を平氣で受けとれなかったのも、ライスキーの心のなかに起きた疑惑の影をさえ潰して終おうと望んだからのことであろう。

彼女が戀をしたなんて、何という愚劣な、飛んでもない話だ！ そんなことは誰ひとり本當にする者はいないのだ。彼女はこれまで通り頭を高くあげて、平氣でライスキーをながめていた。

「さよなら、ごめんなさい！」ライスキーがげんなりといった。

「おや、今日は宅で遊んでいらっしやるんじやありませんの？」彼女はやさしく答えた、「いっつお發ちになります？」

(お愛想の小細工で、丸藥に金をまぶしているぞ！)とライスキーは考えた。

「もう僕は何も用がないじやありませんか？」ライスキーは質問を返事にした。

「お見うけするところ、私の友情なんかあなたには何の値打ちもありませんのね！」彼女がい

った。  
「ああ、とんでもない！ 何が友情です？ あなたは僕を恐がっているじやありませんか！」

「おかげさまで、私まだ何ひとつ恐いものを持ちませんわ」

「まだ何もないんですか？ それじゃもし何か出来たら、あなたは僕に打ちあけてくれますか？」

「だってそれは屈辱的だって、仰言っただじゃありません？ これから私もあなたを恐るかも知れませんわ……」

「恐がるんじやありません！ 僕のいったのは、希望は友情が互に進んだ時に伸びるということでしたが、今はその相互性がないじやありませんか？」彼はおずおずとそうたずねて、さぐるようにソーフィヤの顔を見つめながら、（いかに絶望的に見えても、俺はまだすっかり望みが無い譯じゃないぞ！）と感じて、すぐその場で「馬鹿」と自分をどなりつけた。

彼女はゆっくりと首を横にふった。

「そして……あり得ないのでですか？」彼は相變らず探るように相手を見つめてたずねた。

彼女は笑い出した。

「あなたにつける薬はありませんわ」、彼女がいった、「他の女なら嫌應なしにあなたに媚を呈させてお終いになるんですね。だけど私はそんなのは嫌です、だからはっきりいっておきますが、そんなことはいたしません」

「それじゃあなたは僕に打開けることを恐れる理由はないじやありませんか！」彼は元氣のいいいい方をした。

「Parole d'honneur (正直) 私は何も打ちあけることはございませぬ」

「ああ、ありますとも、ありますとも……」

「いったい何を打ちあけると仰言るんでしょう、dites positivement (具體的に)」

「いいです、伺いませう、あなたはあれ以来、何か變ったことがあると感じますか、あのミラリが……」

彼女は身じろぎをひとつした。彼女の顔はまた仲よしの表情から、とってつけたような冷たい顔に變った。

「いや、いや、pardon (失禮)、僕はあの人の名をいわないことにしますよ……つまり僕のいたかったのは、あの人が現われて、お宅に来るようになってから……」

「お聞き下さい……」ソーフィヤはいい出したが、先をつづけるのが苦しいらしく、ちょっと句切った、「かりに、もしも…… enfin si c'était vrai (要するに、もしもそれが眞實であるとしても)、そんなことはあり得ないのですが」、彼女は括弧に入れるように早口にいい足した、「そうであっても……あああなたからは……もうあなたには……何も……」

彼はかっとなった。

「何の関係もないというんですか！」彼は不意に、目を大きくむいて、熱した口調で相手をさえぎった、「何の関係もないのですか？ あなたは、わが社交界の光りで、眞珠で誇りであるパーホチン家の娘のあなたが、どこかの成り上り者のイタリア人のミラリ輩のところまで成り下って

いるんですぞ！ あなたが……あなたが！」彼は恐怖ともいふべき驚きようをして繰返した。ソーフイヤーの方もライスキーがすっかり逆上して、敵意にみちた眼光を投げかけたので、すっかり驚いて相手を見つめていた。

「だってあの方は第一に伯爵で……成り上りものではありませんわ……」彼女はいった。

「爵位なんか買ったのか盗んだのです！」ライスキーは熱して反駁した、「あいつは、レールモントフにいわせると『幸福を求め獵官をやるために』わが國にやって來、良家に入出し、婦人の庇護をもとめ、官職にもぐり込み、やがて名士となる連中の一人ですよ。用心するんですよ！ 僕の義務はあなたを守ることです！ 僕はあなたの親戚なんだから！」

彼は口角泡をとばさんばかりの勢で、すっかりこの文句をいってしまった。

「あの方のことは、誰ひとり、そんなことを何ひとついう人もありませんでしたわ！」彼女はいよいよ驚きを募らせながらいった、「それにパバーや伯母さま方もあの方に出入りを許していらっしやる所を見ると……」

「パバーや伯母さま方ですって！」ライスキーは輕蔑して彼女の口調をまねた、「あの人たちは何でも知っていますから、よくいうことを守るんですよ！」

「それじゃどなたのいいつけを守ったらいんでしょう？ あなたのいいつけ？」

彼女はにっこりと笑った。

「そうですとも、僕はいつておきますよ、用心なさい！ あれは危険な出稼ぎ人ですよ。あの

興味ある色の蒼さや、猫のような物軟らかさの蔭には厚顔無恥の貪慾がひそんでいるか、何がひそんでいるか分ったものではありませんよ！ あの男はあなたにお世辭をいつているんです……」

「だってあの方はどこにでも出入りをしていらっしやるし、大變に謙遜ぶかく、デリケートで、立派な教養がおありになって……」

「それはみんなあなたの空想にそんな風に寫っているんです。本當ですよ！」

「だってあなたはあの方を御存じないじゃありません！」彼女は笑顔半分で反駁して、思いがけないライスキーの激昂ぶりを慰みものにし始めた。

「僕はいつが Chevaliers d'industrie (詐欺師) だと見破るには一分もあれば澤山です、奴らは餓に追われてイタリイを出て、腹一杯食おうとここへやって來るんです……」

「あの方は藝術家ですよ、彼女は支持した、あの方が舞臺にお立ちにならないのは、伯爵でお金持ちだからですよ…… c'est un homme distingué (あれは立派な人です)」

「ああ！ あなたはあの男を辯護するんですか、いやお目出とう！ それじゃいよいよオリムプスの山の光線はあの男に落ちたんですな！ ああ、ああ、あなたは飛んだ男に目をつけたものですな！ 後生だから、正氣に歸って下さい！ そんな立派な考えを持ったあなたが、あんな恥知らずの出稼人の、天一坊の伯爵のところまで成り下って行くなんて……」

彼女はすっかり興に乗って、さっきからの恐怖も用心も忘れてしまったように見えた。

「それじゃエーリニンはいかが？」彼女が意表に出た質問をした。

「エーリニンはどうかって？」ライスキーは思いがけなくソーフィヤに問いつめられて、自分の方から質問した。「エーリニンはエーリニンですよ……」と詰って、「あれは子供の悪戯で、女學生的な崇拜ぶりですよ。ところがここには情熱が、熱くて危険な情熱があるんですよ！」

「だって、あなたは私のためにあんなに情熱の囁語をいって下さったんじゃないやありませんか。だから私こうして情熱をこめて戀をしていますのよ」、彼女は笑い出し、「私があちらへ行くとするば」、と彼女は街頭を指さした、「エーリニンと一緒にいったって、あの伯爵と一緒にいったって、同じことではありませんまいか？ だって私はあそこに行つて『幸福を發見して、それを満喫する』はずでしたもの！」

ライスキーは齒がみして、安樂椅子に腰をおろし、いこじに黙りこんだ。ソーフィヤは相手の立場を責めて喜んでいた。

「うー！」彼は昂奮して、苦しみもがきながらいったが、それは彼の自家撞着の尻尾をつかまへられて立證されたからでもなく、また美しいソーフィヤが彼の指のすき間からすり抜けて行つたからでもなくて、ただ愛人となる幸運が別の男に當つたと疑つたためにほかならなかつた。その別の男がいなかつたら、ライスキーは安んじて運命に従つたであらう。

ソーフィヤの方は勝利感をおぼえて、それは明るく、平靜に彼を見やるのであつた。相手が正しいので、彼はしどろもどろになつてしまつた。

「どうなさいまして？ 私誰を信じたらいんでしょう？ あの人たちですか？」と彼女は祖

先の肖像を指した、「それとも凡てを投げうち、誰の意見も聞かずに、群衆の中に入りこんで『新しい生活』を送るべきでしょうか？」

「いやここでもあなたは自説に忠實だったんです！」彼はひょっこり一本の槩をつかんで、大喜びで反駁し出した、「祖先の遺訓はあなたの頭の上のしかかっているんです。だからあなたはやっぱり伯爵を選んだのです！ ははは！」彼はひきつるように笑い立てた、「しかしですな、もしもあの男が伯爵でなかつたらあなたはあの男に目を向けたでしようか？ どうです……『私に何の關係がありますしょう？』ですよ」、彼はソーフィヤの言葉を逆用して反駁した、「打ち見たところあの男は、その *homme distingue* はあふれるばかりの才氣と、物珍しさに、ある種の身慄いを加えた話しぶりで、もうあなたの心に觸れて……そして……でしよう、え？」

彼はとつてつけたように笑い出した。

「いいじゃありませんか、すてきですよ！ イタリア、青空、太陽そして戀……」、彼は昂奮して片足をぶらぶら振りながらいった。

「そうよ、憶えていらっしゃるでしょう、あなたの計畫にはそれも入っていましたわ」とソーフィヤが指摘した、「あなたは私を外國にやり、フィンランド村にまで追いやつて、そこで『自然だけを相手』に生活をしろと仰言っていましたわ…… あなたの言葉通りだと、私は今頃は幸福な筈じゃありません？」とライスキーを野次つて、「ああ *cousin!*」といい足して笑い出したが、やがてはっと笑いを収めた。



ライスキーは額越しにソーフィヤを見つめていた。彼女はまた思慮ぶかく、冷たくなった。また用心ぶかさが先に立って来た。

「御安心下さいませ、そんなことは何ひとつ起っていませんからね」、彼女はうちとけた調子でいった、「私ただあなたの新しいお修身に、そんなに注意して下さいましたことにお禮を申しあげただけですわ。だけど私としては今度はどちらを取った方がいいのか迷ってしましますのよ。だって先にはあの街頭に行くと小突いていらっしたのに、今度は……もう私の身を案じていらっするんですもの。可哀そうな私は、いったいどうしたら宜敷いのでしょうか？」彼女は滑稽な従順ぶりを見せてたずねた。

二人とも黙った。

「僕は肖像畫を持って歸ります」、ライスキーが不意にいった。

「あら、なぜでしょう？ 私に贈物として描いていらっしやるというお話でしたのに」

「いや、僕は描きなおすんです。僕はこの肖像畫を描きなおして……罪に落ちた女を作るんです……」

彼女はまた笑い出した。

「ではお好きなように……御機嫌よろしう！」

「あなたも御機嫌よう！ しかし……ね……」

彼は立ちどまった。急に胸のしこりが解けたのである。彼はソーフィヤを笑うとも、自分自身

を嘲笑するともつかぬ、人の好い笑いをうかべた。

「だけど……だけど……僕らはこんな風に、冷やかな、忌々しい思いを抱いて、友だちらしくもない別れ方をしなければならぬのでしょうか？……」ひよっこり彼の口からこんな言葉が飛び出して、忌々しさは消えてしまった。彼は立ちあがって、両手を彼女の方へさしのべた。そして兩の目に感嘆をこめてソーフィヤを見つめた。ライスキーとしては友情がほしかったのでもなく、また彼の心が再びもとの善良な感情に歸ったのでもなかった。そして印象の種はまだすっかり消えてしまわないで、ソーフィヤを見ている間は火花がもえて、彼をひきつけるのであった。彼の聲にはまだおずおずした戦慄がこもっていた。またそれと一緒に、決して悪感情を永引かせない生れながらの、人の良さも物をいった。

「仲好しとして別れましょうよ！ あなたは私の友情に對して、何という仕ぐさをなさったんですしょう？……」彼女は責めた。

「ひとつその友情をもとに返して下さい」彼は嘆願した、「あなたに戀していた従兄を……少しばかり宥してやって下さい、ではさようなら！」

彼はソーフィヤの手を接吻した。

「まさかもう二度とお目にかかれななんてことはないでしょうね？」ソーフィヤが勢いこんでたずねた。

「そんな質問をして下さったお禮にも一度手を握らせて下さい。僕はまたもとのライスキーで

す、そして又あなたにいますよ、戀をしないで、享樂しないで、とね。憶えているでしょう、これはそれこの部屋で僕のいったことです……ただライスキーをすっかり忘れないようにして下さい。だけどあなたは一體なぜ……伯爵を戀したんですか？」彼はにこやかに、そっといい足した。

「またあなたはこの『戀せよ！』を仰言るんですか……」

「もう澤山、猫をかぶるのは澤山ですよ！では御機嫌よう、僕には関係のないことです！僕は目も耳もふさいで、見ざる、聞かざる、いわざるです」と彼は目と耳をふさいでいった、「しかしもしも」、彼はまともにソーフィヤの目を見つめて、不意にいい足した、「僕のいったこと、豫言したことが、ひょっとするとあなたの心のなかに……を呼び起して……自分の首に重荷をかけることになったかも知れませんが、あなたがそう感ずるようなことがあったら、僕に話してくださいませんか？……僕はその資格はあると思います」

「あなたは無理に『屈辱』をお求めになるんですか？」

「構うものですか、僕は友情の騎士とも英雄ともなりませんよ。第一の従兄となりますよ！僕は考えて見て、従兄弟姉妹同志の友情は非常に氣持のよい友情だと思しますので、あなたの友情を受けられます」

「A la bonne heure! (ああ、よ)」「彼女は手をさし出しながらいった、「もしもあなたの豫言なされたような事を感じましたら、あなただけに申上げるか、でなかったら決して誰にも何もいわ

ないことにしますわ。だけどそんなことは決して起らないし、また起る筈もありませんのよ！」彼女は急いでいたした、「それじ、もう澤山、それ馬車が歸って來ましたわ、あれは伯母さま方ですよ」

彼女は立ちあがって、鏡の前で身づくろいをして、伯母たちを迎えに行った。

「手紙には返事を下さるでしょうね？」彼はその後から歩きながらたずねた。

「よろこんで返事をあげますわ、戀の話でさえなければ、どんなことでも……」

(手がつけれんよ!)とライスキーは考えた、(だがどうなるか見てやろう!)

彼はじっと自分の心の底を見つめて、物思いにふけりながら、うつろな目をして靜かに、歩いて行った。心のなかではエゴイストチックな戀と悲哀の痛手が次第に消えて行った。もう情熱もなく、あの俗物で冷たい女のソーフィヤそのものもなく、色さまざまな虚飾のあやも消え、先祖の肖像も、伯母たちも消え、あの憎らしいミラリもいなくなった。

彼の眼前には、純粹な婦人美の一つの嚴肅な像が、まるで霧をやぶったように浮んで來た。それはソーフィヤの像ではなくて、古典的な、不朽の婦人像であった。ただひとつ創造的な空想が浮んで、壮大な一枚の繪にひろがって、ぐんぐん彼をとらえて行くのであった。

彼は息をつめ、藝術的な夢にふけて、溜息をつくこともほかりながら、幻影を見つめていた。ソーフィヤの顔をしたその女の像は、白い冷たい彫刻のように、どこかの沙漠のなかの、月夜のようにあるが、月のない空の下に日光らしくもない光線をあび、かさかさの露出した岩石、

枯れた樹木、流れない水、そして奇怪な沈黙に包まれていた。彼女は膝に手をつき、口を少しあけ、覺醒を渴望するように、石の顔を天に向けていた。

すると急に岩石の蔭から明るい光線がさしこみ、木の葉がふるえ、水の流れが静かな音を立てはじめた。何やら木の枝のなかで羽ばたき、何かが森の中を駆けぬけた。誰やら空中で溜息をついた。すると大氣が流れて、光線が女の像の蒼ざめた額を黄金色にそめた。まぶたはしずしずと開き、火花は胸をかすめ、冷たい身體はふるつとふるえ、蒼い頬には血の氣がさし、光線は肩に落ちた。

後ろには濃いお下げが背中にたれ下り、石像に色彩が入り、生命の波がふくらはぎを走り、膝も動き出し、胸は息をつき、女の像は生氣を取りもどして、うれし氣な眼差しをあたりに投げた……

それから生命は目ざめた自覺のなかに波のようにぐんぐん流れこんで行った……

四肢には生氣がみなぎり肉がついた。像は身じろぎし、きらきら光る目を廣く見開いて、あたりを見廻わし、何かを乞い、待って、何かを訴えはじめた。大空にはぬく味があふれ、頭の上には木の枝がのび、足の下には花が咲いた……

ライスキーは心のなかでその夢を見ながら相變らず靜かに歩いて行った。像も周圍のものもだんだん生氣を帯びて、はっきりとなつて行った……そして彼が家に歸り着いた時には、彼の創作した女はまた、次第にソーフィヤに變つて行くのであった。

沙漠は消えた。彼の空想するソーフィヤはまた自分の部屋にいて、例の服を長く着、ベートルヴェンのソナタをひきながら、色蒼ざめた情熱的なミラリの囁きを、胸をときめかして聞いていた。

しかしライスキーは嫉妬も、苦痛も感じないで、新しく生れ變つたような女の美しさに胸をときめかすばかりであった。彼は二人の戀に見とれ、二人の喜びを喜びとし、その双方を繪に、音樂に現わそうという渴望に身をこがすのであった。彼の心の中では戀人が死んで、無我の藝術家がよみがえつたのである。

(そうだとも、藝術家というものは根を下して、抜き差しが出来ないように身をしばってはいけないのだ)、と彼は忘我の状態で、夢見るように空想をつづけた、(藝術家は戀もし、苦痛もなめ、あらゆる人間的な犠牲を拂つても構わないが、……しかし決してその重荷に打ちひしがれずに、その鎖をとり、元氣に、情熱を捨てて、力づくよく立ちあがって、創作をせねばならない。沙漠も、岩石も創作し、それに生命をさすけて、それが如何に生き、愛し、苦しむ、喜び、そして死んで行くかを人間に見せねばならない……これこそ藝術家が人間の世界に送つてよこされた使命なのだ！……)

ライスキーはこれまでもソーフィヤとの會話や、ナターシャのエピソードや、その他彼の空想の實驗室に入れる筈にして色々のものを書きとめて置いたが、いま見た幻影も詳しく將來の小説のプランに書き入れることにした。

18613

(「いったいこの何處に小説があるんだ?」とライスキ―は悲しく考えた、(そんなものはないはしないよ! これだけの材料では小説のプロログ位のものしか出来はしない! 本當な小説はこれから先に来るか、全然現われないかだ! あの片田舎に行つたつて、どんな小説が見つかるものか! おそらく雄雞と雌雞に圍まれた牧歌くらいのもので、火と動きと情熱を持った生きた人間の小説ではあるまいよ!)

しかし彼はトランクの底にまずその文學的な資料を入れ、それから別の箱に鉛筆や筆でかいた風景や、肖像などの習作を入れ、繪具や筆やパレットも入れて、田舎で小説がうまく行かない時に小アトリエを開くことにした。

その次にやつとシャツや服、祖母と妹たちに持つて行く土産もの少しと、祖母のタチャ―ナ・マルコヴァから頼まれたチート・ニコイヌイチにやるための鹿皮の上衣とズボンを入れた。

(「ではいよいよおさらばか? どんなことになるのか見てやろう!」彼はベテルブルグから出る時に、物思わし氣にこうつぶやいた。

—第一篇了—

昭和二十四年一月五日 印刷  
昭和二十四年一月十五日 第一刷發行

斷崖 第一篇  
定價 九拾五圓



譯者 井上 滿

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地 岩波 雄二郎

印刷者 東京都港區芝三田豐岡町八番地 川口 芳太郎

發行所 東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三 岩波書店  
會員番號A一〇九〇〇四號

圖書印刷・田中製本

# 讀書子に寄す

岩波茂雄

—岩波文庫發刊に際して—

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。書ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに囑まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に開き立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産預約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽す全書が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の編輯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繋縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の實務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議の如何を問行することにした。吾人は範をかのレクタム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を掲げんと欲する。この文庫は預約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧ざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一つの投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は盡力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうらはしき共同を期待する。

昭和二年七月



終

